

ハートは傷だらけ



目次

- 第一話 おさむくんファンクラブ
- 第二話 ハートは傷だらけ
- 第三話 もしも明日死ぬのなら

この本は R-18 です。18 歳未満の方の閲覧を固くお断りいたします。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体・事件とは一切関係ありません。

第一話 おさむくんファンクラブ

中也がこんなにも可愛いやつだとは、それは私にとって大きな誤算だった。

もともと自分は、己の読みを超えてくる誤算という結果が好きだ。それがなければ、あまりに世界は退屈で、人生は長大なものであるからだ。とはいえ、間合いも呼吸も本気の度合いも、本人より先に閲覧した資料に記されていた彼の過去でさえも知り尽くしたつもりでいたところに、まだこんな秘密が隠されていたとは、まさしく嬉しい誤算と表すほかない。こんな一面を知ることが出来るのは自分だけだという事実もまた、私の心を浮き立たせていた。

「ねえ、逃げないでつたら、中也」

「うるせえって、もう…何回するんだよ」

口が腫れちまう、と言って彼の指と指につままれた下唇は赤々と充血していて、それがまた美味しそうに見えた。ぱくりとその指ごと食べてしまうと、綺麗に切り揃えられている彼の爪が私の舌の上を擦ってくすぐったい。やめろって、と濡れた指が逃げ出した。

「散々待たされたんだもの、キスの嵐に吹かれるくらい受け入れてよ。なんだっていつもこんな遠い拠点まで連れてくる

のさ。もつと近い所あるじゃない」

ほら黄金町のおそことか、ちよつと狭いけど、市場の方にもあったでしょ？ と指で方角を指し示して言う、と、なんぞ知ってんだよ、とげんなりした顔をした。

中也と付き合い始めたのは、今から三ヶ月前のことだ。

『魔人』フョードル・ドストエフスキーの計画をなんとか瀬戸際で阻止することに成功し、これようやく横浜も静になるかと思つた矢先、お隣の大陸から異能力者たちが続々と密入国してきた。

鼠は頭目を失い、組合は事実上の分裂状態、軍警、武装探偵社、ポートマフィアの三組織はそれぞれが魔人との攻防で戦力と資金を削られ、消耗していた。今が横浜という金の鮎脈を手に入られる好機だと、あるチャイニーズマフィアがそこら中の悪党に触れ回ったのが着火剤になったらしい。中途半端な規模の異能力組織が揃いも揃って同じ思惑で個々に侵攻してきた。

一つ一つの組織力は雑魚とはいえ、指導者がバラバラ、作戦行動もバラバラでは、こちらも戦力を分散させざるをえず、同じ戦力を使い回しているこちらの分が悪かった。それは火薬庫に油を注いだ大陸マフィアの狙い通りで、横浜防衛サイドが疲弊し消耗戦に陥るタイミングを待ってそれぞれの組織

と一時的に共同戦線を張り、一気に潰してしまおうというのが彼らの算段であった。

まあそんなことは、一番大きい組織のくせに高みの見物を決め込んでなかなか出てこなかった時点で探偵社もマフィアも読んでいたのだけれど。一進一退の状況を装って、こちらも待っていたのだ。親玉が顔を出して、焚き火するのに丁度良い落ち葉を一箇所に拾い集めてくれる時を。

やっと訪れたそのタイミングで中也が汚濁を発動させて敵戦力の九割を殲滅。残り一割は大陸へ逃げ帰って行った。逃げ遅れた残党もいるようだが、さすがにしばらくは手出しをして来ないだろう。

その殲滅戦で瓦礫の山になった市庁舎の前で、「今度こそ俺を拠点まで送り届けろよ。目が覚めて手前が居なかったら、殺すから……にや……」と語尾を怪しくしながら凄んで、中也は倒れた。

さて、それじゃ置いて行きますかと膝に付いた土埃を払って立ち上がった瞬間、ぐらりと視界が揺れて、私もその場に昏倒した。

次に目を覚ました場所は探偵社の医務室。最初からそこにいた一人目の見舞客は中也だった。

安堵、怒り、遠慮、後悔、そんな感情が混ぜこぜになって顔を上げたり俯いたり目を背けたり睨みつけたりを繰り返し、

やじろべえのようになっていた彼を見て、ああとうとう知られてしまったのだと分かった。

「ねえ中也、私たち恋人になろうか」

中也は驚いた顔で私を見た。彼がこの申し出を断らないことは分かっていた。我ながら、なんて卑怯なのだろうと、苦笑しながら私は尋ねた。答えを聞かせてくれないの、と。

それから三ヶ月、相棒に加えて新しく恋人という名前が付いたからといって、今更恥ずかしいデートコースを回るようなことはなく、互いに見つけてきた酒場で取り止めのない会話をし、中也が所有しているセーフハウスで飲み直し、ときどきキスをして、身体に触れるだけのことをした。

黒社会で生きる人間が男同士でのやり方を知らないわけでもないだろうに、彼は私が少し触れるだけでがちに身を固くして、キスより先に進もうとするとあれこれ理由を付けてそれを拒んだ。明日早いだの飲みすぎて眠いだのおなが痛いだの、私相手にそんな粗末な嘘が通用すると思っているのと詰め寄ったら、彼はしばらく黙り込んで、それから絞り出すような声で「びびってんだよ……」と言った。

それはどうやら本音のように聞こえたし、つまり私が初めて身体を開く相手であるということの意味しているわけで、正直非常に気分が良かった。なるほどな、そういうことなら

初心な恋人に合わせてゆっくり関係を進めることもやぶさかではない、とそう思って随分と丁寧に事を進めてきたつもりであつたが、いくらなんでももう三ヶ月だ。いいかげん、そろそろ、いいんじゃないのか？

言つてしまえば、我慢も限界だったのだ。

「だからさ、ここに来るまでの間に酔いも醒めるし、移動の時間も無駄でしょ？ 君のセーフハウスの場所なんて全部私に割れてるんだから、もっと近い所にしようよ。なんなら私の部屋でも構わないよ。狭いけど」

不便な遠い拠点にばかり連れて来る理由を尋ねた私に、中也是「誰かに見られたら困るだろうが。あと手前の部屋って探偵社の寮だろ」と答えた。

「私は別に困らないけど」

「敵対組織の幹部と会っていると知られたら探偵社での手前の立場が」

「探偵社の皆には君のこと話してるけど？」

「はア!? 話してるって、ど、どこまで……」

「どこまで、と言うほど進展してなくない？ 誰かさんが純情すぎるせいで」

うっ、と中也是言葉詰まらせた。

「まあ今の話で分かったよ。私の方は何も問題ないのだけど、

ポートマフィア的には私と君が親密すぎると良くないということだね。森さん？ それとも姐さんかな？ 構成員のプライベートに干渉すぎるのはどうかと思うけど」

前者なら、中也が私にそそのかされてマフィアを離反し、かつて『黒社会最悪の二人組』^{コンビ}とまで呼ばれた戦力と敵対する事態を憂慮しているということだろう。少なくともあの人が首領でいるうちには中也が組織を裏切るなど考えられないが、あの人は常に誰のことも信用していない。ない話ではない。後者なら、まあ単なる過保護と、個人的に私が気に入らないということだろうな。

「首領^{ボス}は関係ない。姐さんも手前と俺のことは知らねえし……単純に俺自身のけじめの問題だ」

「けじめ？ やくざみたいな言葉だなあ。まあ、似たようなものか、マフィアも」

「一緒にすんな。全然ちげえ」

話が逸れた。これ以上しつこくしても成果は無さそうだ。

別に私は、自分と交際していることをオープンにしるって言ういたいわけではない。どうやら私と中也二人のことに誰がしか何がしかの外野が干渉しているらしいことが気に入らない。なんだか自分がマフィアにいた頃にもちよいちよいこういう気持ちにさせられていた気がする。おしゃべりをしている間に、えっちな雰囲気もどっちらけになってしまった。

今夜も無理か。私は小さくため息をついて、飲み直そうかとソファの前のローテーブルに置かれていたワインボトルを手を取った。

「あゝもう、そろそろ私、破裂しそうなんだけど」

葡萄酒なんかいくら飲んだってちっとも酔えやしない。昨夜は恋人とのデートだったというのに、朝寝坊して遅刻するどころかいつもより早い時刻に出勤し、普通に自分のデスクでパソコンを開いている。それもこれも全部あの純情チビのせいだ。二十二歳にもなつて毎回食事だけって何？

私が真面目に仕事していると逆に心配することでおなじみの国木田がノートパソコンの画面を覗き見ながら、何が破裂するんだ、と尋ねてきた。

「何がってなに：あつ、待つて花袋さんからの通信だ」

「依頼していた例の件か」

「それもだけど、こっちは追加の別件」

通信用のヘッドセットを耳に掛けて応答しようとした時、何も置かれていない広いデスクの上に足を伸ばして棒付き飴を舐めていた乱歩さんが「盗聴はおすすめしないよ、太宰」と独り言のように言葉を発した。

「だっておかしいんですよ。あの幹部様はそりゃ骨の髄まで

組織の犬ですけど、一度こうすると決めたらうだうだ言ったりしないし、こそこそ隠れて動くようなことも苦手なんです。森さんでも姐さんでもないとしたら、いったい何があそこまで中也を縛ることができるのか：私の知らない間に恋愛禁止の規則でもできたのかな」

「そこまで分かっているのに分かんないの？ 変なところで鈍いね、太宰は」

「乱歩さんには分かるんですか？」

「まあ、もう依頼しちゃってるなら、それを聞けば分かるんじゃない？ 僕は聞かない方が太宰のためと思うけどね」

知らない、とそちらから降ってきたのに会話を放棄して、乱歩さんは事務所のドアを開けて出て行つた。誰も同行させないところを見るに、歩いてすぐ近くにある乱歩さんお気に入りの駄菓子屋だろう。

花袋さんには探偵社を通さずに依頼したのだが、依頼内容もその結果も彼にはお見通しなようだった。あの推理力に一切異能の要素がないというのだから、つくづく驚く。

先程の会話で私が提供した情報は何だった。中也の性格と、森さんも姐さんも今私を悩ませていることの原因ではないということ、恋愛禁止の規則：は勝手な想像だから関係ないか、そして中也の生活を盗聴してもらった音声を聞けば謎は解けるかもしれないが、私のためにはならないと言う。

「……どういふことだと思ふ？」

「知らん。貴様が花袋に個人的な依頼をしていたことからして俺は初耳だ」

とりあえず出たらどうだ、と国木田が言うのに従い、ヘッドセットを装着して応答する。

「何じや出るのが遅いのう……。日を改めるか？」

応答したのと同時に、待たされて痺れを切らしたような声が聞こえてきた。妙に籠った声に聞こえるのは、また布団にすっぽり入ってうつ伏せの体勢で話しているからだろう。

「いえ、すみません大丈夫です。それで、私から依頼していた別件の方、守備はどうです？」

「モリ・コーポレーションの周辺はジャミングが強力でなあ、音質はあまり良くないぞ。ポートマフィアの本丸なわけじゃから当然じゃが、かなり警戒されとるな」

「聞き取れるレベルなら構いませんよ。向こうに盗聴はバレていないですよね？」

「阿呆う。そんなヘマをする程度の電網潜りハッパカと思つとるならわざわざ身銭切つてまで依頼なんぞすな。しかし、良いんか？ ポートマフィアとの衝突は当面避けるようにと社長から指示が出とるはずじゃろ」

「そこはご心配なく。むしろ仲良くするための調査なので個人的かつ性的な意味でだが。」

「まあ金は先に貰つとるし、依頼の目的までは口を出すまい。まずはこれを聞け。三日前、ポートマフィア幹部専用エリアへの直通エレベーターでの会話じゃ」

「幹部専用エリアは五つあります。誰のエリアです？」

「指定されたターゲット、『重力使い』中原中也の執務室へ続くエリアじゃ。再生するぞ」

花袋の声が途切れ、代わりに砂嵐のようなノイズと、それに紛れて男の話し声がある。確かに音質は良くないようだ。

〈な……さん、……の手筈、整い……した〉

〈おう、……りの……だな。いつだ？〉

〈三日後、十五時……場所はいつもの……の予定です〉

〈そうか、今回はとっておきの……からな。楽しみだぜ〉

〈はい。僕も胸の高鳴りを抑えられません〉

〈分かるぜ。俺も同じだ……芥川〉

「……と、いうわけなんじゃが」

「……は？ なに？ え？ どういふこと？」

「音質は大目に見ろ。あちらさんのやり方を解析して、今はもう対策済みじゃ。だからばれ、途中からは会話もしっかり聞き取れて」

「そういうことじゃないですよ」

ヘッドセットの外で何も聞こえていない国木田が、私の声のトーンが低くなったことに気づき、なんだ、どういうことなんだ？ と尋ねてくる。国木田君、それは私が聞きたい。

何だ今の会話は。どう聞いても中也の声と、話している相手は芥川君だった。なるほど準幹部の彼ならば幹部専用エリアへの出入りも可能だろう。しかし、問題は会話の内容だ。

中原さん、〇〇の手筈整いました。

久しぶり？ の……〇〇だな？

三日後、十五時…場所はいつもの〇〇。

今回はとっておきの〇〇……とっておきの〇〇ってなに？

ちよつと落ち着け太宰治。状況を整理しよう。

つまり、中也は芥川君が設定した時間と場所で行われる予定の〇〇を楽しむにしておき、その理由は今回がとっておきの〇〇であるからで、『今回は』と言うからにはこれが定期的に行われる予定であることを意味している。芥川君が『僕も』と言っていることから、彼は中也の予定のセッティングのみを担当しているわけではなく、彼自身もその予定に参加するはずであり、なんと『胸の高鳴りを抑えられない』らしい。私がマフィア時代に散々教え込んだあのポーカーフォイスが、中也との予定が楽しみで胸の高鳴りを抑えられないと、そして、中也もまた、同じ気持ちだと言っている。

「……………いやデートじゃん！」

「な、何？ デート？ お前は何を言っているんだ？」

「こんなのどう聞いてもデートの相談だよな？ あのスケコマシ蛸蟪！ 私のことは遊びだったんだ！ そりゃ確かに自分が弱ってる卑怯な状況で半ば同情に付け込んでOK貰った自覚はあるけど、でもだからって本命がいるなら正直にそう言えばいいじゃないか！ そいつをこの世から消せば済むことなんだからさ……おい敦君、近々、芥川君と決着付ける予定ない？ 私、手伝ってあげるよ」

突然話を振られた敦が、業務用キャビネットから「巻き込まないでください」と大きく書かれたプラカードを出してきて掲げた。敦君もすつかりここに慣れたなあ。

「さっきから何を言つとるのか分からんが、この三日後の十五時というのはちようど今日、これからじゃ。ターゲットは今移動中…そうじゃ、ついでに探偵社からの依頼の方も話しておくぞ。そこに国木田は居るか？」

「いますよ。国木田君、別件の方で報告だったさ」

ヘッドセットを外して内蔵スピーカーに切り替えると、国木田がモニターのカメラに映るように身を乗り出した。

「別件は貴様の方で、こっちが本題だ馬鹿者。花袋、何か分かったのか？」

「太宰の依頼の方は、中原中也とさっきの会話の男との約束の期限まであと十分ほどあるのだな。その間に報告するが、

まず先日の大陸マフィアとの大規模抗争について、探偵社の読み通り、拘束されても帰還してもいない残党が居るな。分かつての限りでは一名。おそらくこの一名だけじゃ」

「それが確かと言える根拠は何だ？」

「あの、『男との約束』とか言うのやめてもらえますか？」

「黙ってる貴様は！　今はこっちの話だ！」

「国木田よ……こいつは大丈夫なのか？　とうに探偵社を辞めた僕が口を出すのも何じゃが」

「大丈夫でないことは確かだ。いいからこの馬鹿の言うことは無視して続けろ」

「あだだだやめてやめてギブギブ天国見えちゃう」

「望み通りだろうが、ちよつとそこで大人しくしていろ」

背後から国木田にヘッドロックを決められ、床にダウンしたところで、空いた私の椅子に座られてしまった。

頬に当たる床の感触が冷たい。九十度に曲がった視界の隅で、事務所の扉が開き、乱歩さんの黒いスリッポンが入ってきたのが見えた。がさがさと戦利品の駄菓子子の袋が擦れ合う音がする。そうか、十五時……おやつ時間なものな……と納得しながら、そのまま身体を起こし、床に胡座をかいて聞く。

「先日の一件で密入国した異能力者のリストを特務課が持っている。それを閲覧した。そこから、探偵社が拘束し警察に引き渡した者、ポートマフィアに拘束されポートマフィア内

の記録に残された者、抗争中に死亡し死体を回収された者を照合すると、一人だけ該当せん奴が居る」

「記録から漏れているって可能性は？　死体の損壊が酷くて確認できなかった可能性もあるよね」

駄菓子子の入った紙袋を私のデスクの上に置いて、乱歩さんがまるで初めから会話に参加していたかのように、するりと入り込んで来た。

「前者は無いとは言えん。じゃが、後者の可能性は低い」

「その根拠は？　ああ、特務課……そういうこと？」

「よく分かるのう。そう、それはこの男の来歴が……む？　待て、もう一つの依頼の方、時間になったようじゃ」

その言葉に私はすつくと立ち上がり、国木田の肩を力一杯揉みながら彼の背中越しに画面を凝視した。

「えー？　まだそっちの話終わってなかったの？」

「花袋さん早く早く。早く早く早く早くして」

「分かった分かつとるから怖い！！　すまんのう乱歩、続きはもう少し裏を取ってからまた報告する」

「はーい、がんばって。ま、もう大体分かったけどね」

たまにはまた遊びにおいでよ、と言って、乱歩さんは国木田の顔の前に左手を突き出しバイバイとその手を振ると、駄菓子を抱えて自分のデスクへ戻って行った。

「場所は西区の貸し会議室じゃな。映像は出せんが勘弁しい、

音質は良好じゃ。じゃあ、繋げるぞ」

花袋の声が小さくなり、代わりにガタガタとおそらく机や椅子のような物を移動する音と、複数人の話し声が聞こえてきた。中原さん、と一斉に歓待する声上がる。声から判断するに、女性の数の方が多いようだ。

「中原さん、申し訳ありません。今、準備が終わります故」
「いや、俺の方こそ悪かったな、ぎりぎりになっちゃって」
「へんでもありません。僕も今しがた着いたところです」

「デートの会話じゃん！」

待った？ いや今来たところ、っていうお決まりのアレだ！
私が遅刻して『ごめーん待ったあ？』って聞いたときは『待ったに決まってるんだろ。時間も守れねえ奴は死ね』って対応だったくせに！ 待たせる側になるのは良いの？ それとも実は年下がタイプだったの？

「……あのな太宰、俺はようやく貴様が花袋に依頼した内容に見当がついたところなんだが」

これは浮気現場ではないと思うぞ、と近いようでの外れなコメントをする。

私が依頼したのは、中原中也が太宰治との接触に関して何らかの制限をされているのではないか、されているとしたら、

その内容と首謀者の特定、であったのだが、結果的に中也の浮気を疑って素行調査してもらっているような状況になっている。

「一応聞くけど、どうしてそう言い切れる？」

「どうしてってお前な…貸し会議室で逢引はないだろう」

「甘い！ そんなことだろうと思ったよ！ はくくこれだから童貞田君は困るんだ！ 想像力に乏しすぎる！」

「どつ、どつど童貞ちゃうわ！」

「場所が会議室だから逢引じゃないだって？ これがオフィスセックスのイメージプレイの舞台装置ではないとなぜ言い切れる？ この周りにいるお姉さんたちもそのために雇われた役者さんとしたら？ クソッ：『準備』とは何だ？ 会議室のハコだけでは足りないというのか？ まさか…そうか、これは、時間を止めるストップウォッチ！」

裏拳で殴られた。

「女性社員もいる職場でA Vの話をするな！」

「知ってる国木田君も同罪だと思っけどな〜」

「ちよいと、乱歩さん、あそこの馬鹿どもはさつきから何の話をしてるんだい？」

「与謝野さんは関わらない方がいいと思うよ。放つとこ放つとこ。さくらんぼ餅食べる？」

「また懐かしいものを買って来たねえ」

はあー、と花袋の最早諦めたようなため息に混じり、着々と盗聴マイクの向こうでは舞台のセッティングが進められている。プロジェクトに何か映すらしい。

中也が他の参加者たちに着席を促した。どうやらこの会の仕切り役は芥川君で、中也は上位の参加者の立場にあるようだ。芥川君にとっては実際上司なのだから自然なことだが、周囲の人間もそれに準じて動いていることから、彼らもまたマフィア内部の人間、あるいはその規律を知っている者だと推測できる。

だとすると、わざわざマフィア本部とは別の場所を用意してまで構成員同士で集まる理由は何だ。森さんの目の届かない場所で幹部の一人が準幹部を使って少なくとも人員を招集する：これではまるで、クーデターの企てではないか。

「あの馬鹿：いったい何をしようとしているんだ」

それでは映します先輩、と、この声は確か：聞いたことがある。樋口という芥川君の部下の女性だ。

プロジェクトに何かが投影されたのだろう、次の瞬間、その空間は熱狂的な歓声に包まれた。パソコンの内蔵スピーカーがびりびりと振動するほどの音量だった。異常な興奮状態、彼らをそこまで刺激するシンボリックな存在が映し出されたのだ。

「花袋さん、映像は無いの？」

「無いと言ったじやろうが。諦めい」

気になる。それを見ることができればこの会の目的は一目瞭然だろうに、残念ながら会話から推理する他ないようだ。

〈静まれ。中原さんが話される〉

〈まったくテメエ等は：気持ちとは分かるが、今更タクシーを停めてる写真くらいで騒ぐな。そんなんじや、今日は心臓がもたねえぜ？〉

「タクシーを停めてる写真？」

「しっ、国木田君黙って。聞こえない」

〈例の抗争でこの会合もリスケ続きだったからな。今日こうして久しぶりに集まれたことを嬉しく思う。調整してくれた芥川、それに樋口、ご苦労だった〉

ぱちぱちぱち：と拍手の音が入る。

〈中にはまだ体調が万全でない奴もいるだろう。病院から抜け出して来た奴もいるな？ 終わったらちゃんと戻れよ〉

今度は、わははは：と湧き起こる笑い声。

「おい太宰、これは盗聴して大丈夫なやつなのか？ 向こうにバレたら休戦協定に抵触したと難癖を付けられかねんぞ」

「ちよつと黙っててつてば、国木田君」

なんだこれは。今の会話からやはり参加者は全員ポートマフィア内の人間であることは間違いないというのに、気味が悪いほど和やかな雰囲気である。

〈あの抗争は熾烈を極めたが、思わぬ副産物として大量の写真と動画データを入手することができた。皆の頑張りに感謝する。……それじゃ、始めるとするか。芥川〉

〈はい。皆、いま中原さんが話された通り、今日映す作品は全て皆が死線を掻い潜り収集した成果である。それを胸に刻み、心して鑑賞するように。それではこれより、〉

〈第八十五回、『おさむくんファンクラブ』を開催する！〉

ワァーッ！ と大歓声が起こった。

「……………国木田君」

「……嫌だ。黙れと言ったのは貴様だ」

「お願い！ 何か言って！」

だから聞かない方がいいって言ったのに。
そう呟いた乱歩さんの声はすぐにかき消され、地獄のように
楽しげな秘密集会の幕が今、画面の向こうで開いてしまっ
たのであった。

第二話 ハートは傷だらけ

移動中の車内で後部座席のシートに浅く腰掛け、俺は今しがた首領との通話を切ったばかりの端末画面を見つめていた。些か面倒なことになった。

つい先日まで続いていた大規模な大陸間抗争で、ただでさえドストエフスキーとのドンパチで傷ついていたうちの資金と人員は更に削られることとなった。死者こそ少なく済んだものの、構成員の半数近くが今も組織御用達の総合病院に入院している。

そんな状況下で、その大陸マフィア側の残党がどうやら今も横浜に潜んでいるらしいという情報が入ったのだ。

情報源は外部の電網潜りの男で、腕はそこそこだが金さえ払えばどんな仕事でも請け負う使い勝手の良さと、こちらに有益そうなネタを向こうから売り込みに来る商売根性が気に入られて、過去に何度か取引をしていた。そいつからのタレコミがあつたのだ。

「さすがにすぐには手出しをして来ないだろうけど、なにせ今うちから出せる人員は少ない。その逃げ遅れの人数と戦力だけでも把握しておきたいところだねえ…探偵社が警察に引き渡した人数が分かると良いのだけど。ねえ、どうだろうか」

首領の執務室に呼ばれ、その電網潜りのアジトへ脅しも兼ねて直接出向いて行くよう命じられたのだが、そのとき首領はそう言うって意味深な視線を俺に向けた。

「ありやあ、やつぱりバレてるな。」

三ヶ月前から、俺と太宰は恋人同士として付き合っている。嘘みたいな話だが事実だ。別に忠誠を誓った首領を欺いてまで隠しておきたいと思つたわけではない。ただ、相手が男で、しかも俺。どうせすぐに飽きて女遊びを再開し、元の関係に戻ることになるのだから、わざわざ報告する必要はないと判断したのだ。

しかし、報告せずとも首領はとうにご存知の様子だった。なんとなく、首領にはすぐに気づかれるのではないかと思つていたのもそれは構わない。厄介なのは、その恋人同士という立場を利用して太宰から探偵社の得ている情報を引き出すよう望まれているらしいことだった。

あいつのことだ、タダで教えてくれるとは思えない。いったい何を要求されるやら…考えるだけで憂鬱である。既に現時点で、向こうからの要求を再三突き返しているような状況なのだから、尚更だった。

「…おい、次の交差点を右に曲がってくれ。橋を渡って細い路地に入つたところにある雑居ビルの前で停めろ」

「かしこまりました」

運転手は淡々と目的地へ車を走らせる。

こいつは元々太宰の専属運転手をしていた男で、ヤツが組織を抜けた後はしばらく誰の専属でもなかったが、俺が五大幹部に昇格したときからは俺の専属となっている。

俺は車は自分で調整して自分で運転したい方だし、戦闘になる場合には異能を使った方が早いということもあり、運転手を必要に感じたことはなかったが、幹部という立場にもなるとそれでは格好がつかない場面もあるということで、半ば周囲に押し切られた形で任命した。

この男を選んだのは、太宰の部下で長続きしていたという時点で相当に優秀か余程の変人かのどちらかであって、変な噂は聞かなかったから、前者だろうと思ったのだ。

実際、その選択は正解だった。寡黙だが気が利いている。運転も上手いし、市外の地理にも明るい。太宰の元相棒である俺の運転手になったというのに、気安くヤツの話を持ち出してくるようなこともしなかった。

そして、いざ運転手を使ってみると、存外に快適だった。移動時間に思考に集中することができる。太宰がいなくなっただけは、ごちゃごちゃ考える役割が自分にも回ってくるようになったので、これは正直ありがたかった。考えることが苦手というわけではないが、性に合わない。自分が出向いてブツ潰せば早い、いつもそう思ってしまうのだった。

今もまさに考えるべきことがある。ちようど件の電網^{ハツカ}潜りを訪問して、その結果を先程首領^{ボス}に電話で報告したところなのだが、ダメ元で聞いてみたものの、やはりそいつでは探偵社が警察に引き渡した敵勢力に関する情報は入手できないということだった。軽く脅してもみたが無理なものは無理ということで、そうなつてくると、その程度の腕で『残党が横浜に潜んでいる』という情報をどうやって得たのかという疑問が浮上する。タレコミの時点では、特務課から傍受した情報だと言っていたが、探偵社の情報も盗めないような電網^{ハツカ}潜りがやすやすとそんな情報を得られるものだろうか？

内務省異能特務課。国内の異能者の統括と異能組織犯罪を取り締まることを役割とし、その構成員たちもまた異能力者という、国内最高峰の異能秘密組織だ。しかし実情は、統括というよりは把握と監視という表現が似つかわしい。戦場に自ら現れることもなく、必要時には各地の異能力者に連絡を取り、顎で使うような真似をする。『異能者を管理』している気になっているのだ。自分にとっては浅からぬ因縁があり、気に入らない連中であるが、だからこそ分かることもある。

奴等にとつて異能力者の情報は最も重要かつ強力な武器だ。それをそこの電網^{ハツカ}潜りにあつまり盗み見られ、しかも見られたことに気づいてもいない？ 自分には、どうにもそこが腑に落ちなかった。

電話で報告した際の首領^{ボス}の反応は淡白なものだったが、おそらく首領^{ボス}もそこを訝^訝しんでいるだろう。ああ、ひよつとしたら、その点も含めて、探偵社側の動きを探らせようというおつもりなのかもしれない。探偵社員の中には以前、情報の収集・操作に特化した異能力を持つ電網^{ハック}潜^カりがいた。数年前に辞めたらしいが、今も繋がりはあるだろう。現時点で、探偵社の方がうちより多くの情報を得ている可能性は高い。

「中原様、目的地に到着いたしました」

「おう。……相変^相わらず、ナビみてえな言葉遣いだな」

「恐縮です」

「褒めてねえ」

今日はもう帰っていいぞ、と言うと、俺が出た後のドアを手で閉め、帽子を脱いで一礼した。

Uターンして去っていく黒のメルセデスを見送りながら、とりあえず考えるのは後にしようと思いを止めた。あの情報屋あるいは太宰の野郎から追加の情報を得てから突き詰めた方が効率的だ。今考えたところで、妄想レベルの話になる。

それに、今日はこれから特別な会合がある。大暴れできる任務の前と同じくらい、気分が高揚していた。急遽日付と会場の調整がついた三日前から楽しみにしていたのだ。本当は準備の段階から駆けつけるつもりでいたのに、先の用事で開始時刻ぎりぎりの到着になってしまった。

会場に指定された貸し会議室の扉の前で、四桁の暗証番号を入力する。かちりと小気味良い音が鳴り、ノブを回して扉を開けると、既に集まって準備を進めていたメンバーが笑顔を見せて駆け寄って来てくれた。

「中原さん！ すみません、みんな今日に限って任務が遠方になってしましまして……もう暫くお待ちください」

「申し訳ありません。今、準備が終わります故」

女性のメンバーの後ろから芥川もやって来て、当日配布用のペンライトを俺に一本差し出した。微妙に異なる青色だけが光るようになっていた特注品だ。指を二本立てて見せると、頷いてもう一本渡してくれた。

「いや、俺の方こそ悪かったな、ぎりぎりになっちゃって」

「とんでもありません。僕も今しがた着いたところです」

「芥川さん、プロジェクターの準備完了しました」

「ご苦労。前回のような失態は無いだろうな」

「はいっ！ 3000ルーメン以上の4Kプロジェクターを用意いたしました！」

「よし」

「今の技術では、これ以上の性能の物はありません……ですが、これを以てしても現実には遠く及ばないのが……悔しいです！」

「致し方あるまい。現実こそが最上にして至宝。僕たちが見ているものは所詮……あの方が残した残像にすぎないのだ」

今回のプロジェクターを発注したメンバーが芥川の言葉に拳を握り、唇を噛みしめる。分かる、分かるぜ。

彼らの背後で、前回プロジェクターを用意した樋口が居心地悪そうに話しかけるタイミングを窺っている。前回是她女が用意したプロジェクターの画質がいまいちで、芥川がそれにひどく腹を立てたのだ。樋口は「でもでも先輩これは価格コムでコスパ最高だって人気も一位でその、軽量で鞆に入れて持ち運べるしですから」と必死に言い訳したが、「貴様ァ！言うに事欠いてコスパ？ 軽量だと？ 巫山戯るな！ あの方のために耐えられぬ重さなど無い！」と芥川の怒りをさらに燃え上がらせることとなり、あわや流血沙汰となったところを全員で必死に止めたのだ。自分の見たものを触れた人間の視界に共有できる異能力を持ったメンバーがいたおかげで、その回はなんとか無事に進行できたが、全員が手を繋いで目を閉じていなければならなかったため、なんだかオカルトめいた光景になり、また、手が塞がっていたのでペンを振ることもできなかった。樋口は芥川からそれを叱責され、今後備品の発注担当から外されたのであった。

あれから何日も経ったというのにいまだに引きずっているらしい樋口を見かねて、全員に着席を促すと、彼女はほっとした表情になり、室内の照明を消してプロジェクターを起動させた。

「あ、あの、それでは映します先輩」

全員の視線がスクリーンに集まる。写真が映し出された。

キャーッ！ とたちまち起こる黄色い歓声と、それに入り交じる野郎の唸り声。フロアが一瞬にして熱くなる。天井や壁を飛び回るブルーのペンライトの光。これ wait していた。他の何にも代えられない高揚と興奮を与えてくれるもの。

スクリーンには、元町の路上でタクシーを停めようと片手を挙げている太宰が映し出されている。

芥川に目配せすると、口元を手で覆って咳払いを一つした。

「静まれ。中原さんが話される」

「まったく teme 等は：気持ち分かるが、今更タクシーを停めてる写真くらいで騒ぐな。そんなんじや、今日は心臓がもたねえぜ？」

抗争のせいで予定していた会合がごとく延期になったこともあり、自分だけではなく、皆が今日の開催を楽しみにしていたのだろう。熱量が違う。

抗争が終わった後も、大幅に削られた資金の補填や、負傷した構成員の任務の代行などで、誰しもが通常の倍の仕事量をこなしていた。それでスケジュールの調整が難しく、まだあと数ヶ月は延期だろうと思われていたのだ。急遽三日前に開催の手筈を整えてくれた芥川と樋口を労う。他のメンバーからも拍手があった。

「中にはまだ体調が万全でない奴もいるだろう。病院から抜け出して来た奴もいるな？　終わったらちゃんと戻れよ」

頭に包帯を巻いている奴、腕にギプスを装着している奴、壁に立て掛けられている松葉杖、彼らの上司に見つかったら大目玉だろうが、まあそこは上手くやってくれているだろう。万が一見つかったとしても、処罰されずに済むように自分がこっそり裏で取り計らうつもりでいる。この場においては組織の上下関係は気にせず無礼講で、としているものの、幹部である自分がいて、こうして楽しませてもらっている以上、この会に何か不都合なことが起こったときには、他の奴等にはできないことのできる権限を持つ者としての責任を果たすべきだと俺は考えているからだ。

それにしても、三ヶ月経った今もこんなに負傷者がいたか。今日ここに集まっているメンバーは、大半が組織に四年以上在籍している手練ればかりだ。芥川や自分を始め、強力な異能を持つ者も多い。それにこれだけの怪我を負わせたのだから、改めてあの抗争の激しさが思い起こされた。

たいした戦略も持たずに突っ込んで来ただけの連中だったが、数だけはべらぼうに多く、多勢に無勢な上、親玉は遅刻。消耗戦になっていたので、結局、最終的に汚濁を使って終わらせたわけだが、武装探偵社と示合わせて動いたために、思わぬ副産物として太宰の盗み撮りや盗聴のデータを大量に

入手することができた。勘の良い奴なのでいくつかは気づかれていたかもしれないが、鉄火場でいちいち構ってもしられなかったのだろう。おさむくんファンクラブの『掟』の一つである『この会の存在を太宰に知られるべからず』は守り通せたようだった。

「皆の頑張りに感謝する。それじゃ、始めるとするか」

「はい」

合図を送ると、俺の考えを汲んでくれたように、今日公開するデータがどれほど価値のあるものかということを経川は説いた。なんて出来た部下だろうか。あいつが教育係だったとは到底信じられない、マフィアの鑑のような男である。

「それではこれより、第八十五回、『おさむくんファンクラブ』を開催する！」

ワァーッ！　と大歓声が起こった。

「はい！　まずは私から、良いでしょうか！」

さっそく一人の手が挙がった。

おさむくんファンクラブとは、その名の通り四年前にボートマフィアを抜けた元最年少幹部『太宰治』の、顔が良くて声が良くてスタイルも良くて頭も良くて冷酷で無邪気で繊細で女たらしで過去の経歴が一切不明で趣味が自殺で誰にも心を開かず誰からも理解されることのない、そんなところが好きで好きでたまらなくて君が好きだと叫び出したくなっ

まった人間たちの社交場である。さすがに組織の裏切り者である男を慕っていると大っぴらには口にできないため、もし組織内の人間にクラブの存在を知られてしまったとしても太宰とは全く関係ない芸能人のファンクラブであるということにして誤魔化そうという発案から、この名前になった。これで街中にいるときでも堂々と「昨日のおさむくんはやばかった」という会話をするができるというわけだ。ちなみにムカイオサムという芸能人のことを俺は良く知らない。基本的な活動は、太宰の日常生活の盗撮および盗聴と、入手したデータのメンバー間での共有、太宰治という男の素晴らしさについて語り合うことである。

「いいだろう、許可する」

「ありがとうございます！」

開始前からスクリーンに一番近い席を陣取り、ずっと落ち着かない様子でいたメンバーの一人が、USBメモリーを大切そうに両手で持って、プロジェクターに接続されている端末の前へ進む。映されていた写真が消えて、彼女が差し込んだUSBの中に保存されているデータが読み込まれた。フォルダ名は『OSAMU NARITA』となっている。

「おい、手前。フォルダ名はちょっと誤魔化せ。あと、プロテクトをかけろ。万が一、探偵社の連中に拾われたらどうするつもりだ」

「あつ……！ 申し訳ございません！ 今朝、急いで中身をコピーしてきたものですから……！」

「以後気をつけろよ」

彼女は先の抗争中、異能力者が入国してきたときには敵陣との合流を果たす前に即時始末、可能であれば捕縛する任務を与えられていた。空港に張り付いてばかりで、太宰を追う時間は無かったはずだが……とその場の誰もが思っていたとき、予想を裏切る映像の暴力が映し出された。

「パ、パパパイロットー！！」

「えっ？ 何これ夢？ 無理です」

「馬鹿野郎、まだ死ぬな！ 加工って可能性も微レ存」

「加工じゃありません！ 探偵社もうちと同じ目的で、増援が来たときには捕らえて情報を引き出そうとしていました。

これは、スタッフルーム兼更衣室に設置していた隠しカメラに偶然映り込んだ映像です」

「ねえねえ敦くん、どう？ 私のパイロット姿？」

「へよくお似合いだと思いますよ。でも僕は……こっちの清掃員の服とかの方が気が楽なんですけど……」

「へ諦めたまえよ。空港内を探るにあたって、権限設定が高いIDを作って貰ったらこうなるのさ。それに見合った服装でないとい、逆に怪しまれるだろう？」

〈でも、パイロットって何喋ったらいんですか？〉

〈堂々としていれればいいのさ。あんな奴いたっけと思っても失礼があつてはまずい。自然な態度でIDを使って歩き回っていれば、わざわざ「おまえは何者だ？」なんて聞いてくる人間の方が少ないと思うよ〉

〈うう…大丈夫かなあ…〉

「制服最高〜〜！！ 腰がエロい〜〜！！」

「普段はコートのひらひらに隠されているスタイルの良さが惜しげもなく曝け出されていますね」

「私をボーイングに乗せて〜〜！！」

「おのれ人虎！ もっと太宰さんを褒めろ！」

「そうだそうだ！！」

「おさむくん♡アテンション♡プリーズして♡」

「団扇を作る速さが神業」

お分かりいただけたでしょうか…とやり切った表情で彼女は動画を止め、USBメモリーを取り外し、皆に一礼して席に戻った。着席してからも、しばらく拍手が鳴り止まない。

「ああ…怖かった。凄すぎてむしろ怖いっていう感情」

「わかる」

「なんで横浜港の担当だったんだろ…、私も空港の方を張っていたらナマで見たかもしれないのに悔しいです」

「ていうか最初からこれってやばくないか？」

「俺は聡明な人間だから救心を飲んだ」

「二粒ください」

激しい動悸に襲われ、胸を押さえて喘ぐメンバーに救心の小瓶が回される。ひよっとすると、今日は死人が出るかもしれない。そんな予感を感じさせるほどの映像だった。

敵の情報が欲しいだけなら、わざわざあんなコスプレをしてまで空港内で待ち伏せる必要など無い。あれは絶対わざと楽しんでやっていたのだ。太宰のお遊びの作戦に振り回された人虎には気の毒だが、誰も太宰の悪ふざけを止めなかった、恐らくそんな暇もなかったのであらうことに感謝しかない。

ありがとう武装探偵社、ありがとう成田空港。

「じゃあ次は、みんな大好き『人間失格発動シリーズ』いきまーす！ 先の抗争で入手したものを集めてスライドショーにしてみました！」

「いや早いだろ！ いつもそれトリだろ！！」

「だって今日は、芥川さんがとっておきのものを用意しているって言うから…」

「血圧が保たない」

「自分、お注射一本いっすか？」

「バカ野郎！ それ敵対組織から押収した危ないやつだろ！」
「こうでもしないと直視できる気がしない」

「遺書を書いてくれれば良かった……」

敵側の様々な異能力者を相手に、太宰が異能無効化を発動させている画像や動画が映し出される。一度でいいから太宰の人間失格を食らってみたい、それはここにいる俺と芥川以外の全員が夢見ていることだった。何度も体験済みの俺と芥川も、『良いものは何度見ても良い』という持論でいつもこのシリーズが始まるとテンションが上がる。

しかし今日は、素直にペンライトを振る気にはなれなかった。青い閃光が飛び交う中、俺は複雑な思いでスクリーンの中の太宰を見つめていた。

「太宰さん！　なんとお強い！　全宇宙で最強！　全人類の中で最高！」

腕を振り上げ歓声を送っていた芥川が、俺の声が聞こえてこないことに気づいて不思議そうにこちらを見た。俺はスクリーンを指差し、気にするなどジェスチャーを送った。

これだけの人数を相手にして、最後に俺の汚濁を無効化した。あいつはあの時すでに、いつ倒れてもおかしくない状態だったのだ。

「ハァハァ……すごいポリウムだった……正直敵の異能力者が羨ましい」

「ほんとそれ。嫉妬と憎しみが止まらない」

「全員拘束して拷問したかったですね」

「肩ポンもずるいですけど、手を繋いでもらってた女いませんでした？」

「あいつ、おれが殺した女だわ。これ見た後だったらもったじつくり時間かけて殺つたのにな」

「そんな余裕もなかったですもんね」

はあ〜とどこからともなくため息が漏れる。

そうだ、殺してしまった奴を生き返らせることはできない。

ここで一度小休憩が挟まれ、メンバー間でのデータの受け渡しが行われる。クラウド上にアップしてまとめて共有していた時期もあったが、太宰が探偵社に在籍していることが分かっていたから、見つかるリスクが高いため、こういうアナログなやり方に変えた。おさむくんファンクラブの中の『掟』は絶対なのである。

一通りその作業も終わって、各自持参した飲み物を口にしなから、『最近のおさむくん目撃情報』の話題で盛り上がりつつあった。

おもむろに芥川がすつと席を立ち、壇上に上がる。一度休憩の合図に灯された照明が再び消され、室内が暗くなると、がやがやと談笑していた者たちが一斉に話すのをやめた。来るぞ。今日のために仕込んでいた芥川のとっておきだ。

「……僕は、過日、武装探偵社にある依頼をした」
やつがれ

その場の全員が固唾を飲んで見守る。

「依頼人は僕が雇ったエキストラの女だ。太宰さんが休みで不在の日を狙って行かせた。依頼内容は、情報操作系の異能力者によるSNS犯罪の捜査」

「ま！ まさか……！」

「然り。探偵社がこの依頼を受けたことにより、人虎にインスタグラムのアカウントを作らせることに成功した！」

「来たー……！！」

「えっ!? 法に触れずに太宰さんを摂取できるんです!?」

「合法ドラッグ」

「流石川先輩！ その手があったかー！」

予想通りの反応に芥川が満足そうに頷く。ずっと前から皆が欲していた、日々更新される太宰治。何度も武装探偵社へ向けて公式SNSを開設してほしいと匿名で要望を送っていたが、全て蹴られていた。唯一事務の女性がツイッターのアカウントを持っているのだが、猫の写真しかアップされない。他の連中は興味が無さそうだし、望み薄だと、何回か前の会合で泣く泣く断念していた案件だった。

「ほ、本当だアカウント作ってる！ @atutu_moon」

「アカウント名だっさ!!」

「プロフに『武装探偵社の中島敦です』ってモロに書いてるけど大丈夫なのか？」

「慣れてない企業アカウントみたいだな」

「この『コインランドリーにきました』って投稿やっばい」

「は？ なにこれ匂わせ？ 絶許」

「そんなことより革ジャンだよ！ レアだろ！」

「この『おはようございます』ってやつ、人虎の部屋じゃないですか？ てことはおさむくんの部屋も同じ間取りってことですよね？」

「資料が貴重すぎて博物館が建つ」

「窓の外に映ってるドラム缶、これ人の足じゃないですか？」

「本当だ！ おさむくんスーチャレシリーズに加えよう！」

スーチャレとはスーサイド・チャレンジのことである。

「やばく……めっちゃめっちゃおさむくんのカットイン率高いですよこれ。保存が止まらない。写真フォルダの湿度90%」

「熱帯雨林かよ」

「探偵社のソファァーに映ってる足も太宰さんだ！」

「世界一興奮するアハ体験」

ほら見ろ、だから探偵社の寮は駄目だって言ったんだ……と思いつながら、自分も手元のスマホで人虎のインスタを眺める。なんだこれは最高だな。

「この、パーティーに潜入してるやつ、正装がやべえな……」

おさむの顔が良すぎる、と俺がこぼすと、他のメンバーもその投稿を見つけて、んあ……と一様に天を仰いだ。

「髪を耳に掛けられると、致死量に達するんですよ……」

「わかる〜でつぶるの時も色んな意味で死にかけた」

「淫澤事件のことをでつぶるって言うな」

「たまには、また白を着ているところも見たいですね」

「白のタキシードとか？ 結婚式？」

「馬鹿言うな。おさむくんはみんなのものだ」

「太宰さんは誰のものにもならぬ。太宰さんは概念」

「ですぬ〜」

「そういえば、今つきあってる女って誰でしたっけ？」

突然の話題に、飲んでいたミネラルウォーターが変な器官に入ってしまった。げほげほと咽っていると、大丈夫ですか？と紙袋が差し出される。違う、過呼吸じゃない。

「サエコだろ？」

「いや、あれはもう別れてるだろ。自然消滅」

「抗争で忙しくって、そこまで追えてないですね」

「おさむくんもインスタやってくれないかな〜」

「え、無理。彼女とのツーショットとか上げられたら死ぬ」

「どうせ誰も本気じゃないんだから、気にしてもキリないぞ」

「俺もそう思う」

「ほら、相棒の中原さんも言うんだから、そうなんだよ」

「元、だ。元相棒」

あいつの女癖の悪さは昔からだ。付き合ったかと思えば次の日には別れている。全部ただの気まぐれで、すぐに飽きる。

「それなら、私にもワンチャンないですかね？」

「うっそ、まじで言ってる？ やめときなよ、おさむくんは最高だけど、実際に付き合いたいかって聞かれたら、それはなんか違うっていうか……」

「……俺も、そう思う」

「ほら、相棒の中原さんが言うんだから、そうなんだよ」

「元だっつうの」

「中原さん！」

「……な、なんだよ」

ややハラハラする会話の最中に、一人が自分のスマホの画面を見ながら大声を上げたので、何か失言をしてしまったのだろうかとか冷や汗が噴き出た。おさむくんと付き合っていないなんて掟はないが、『太宰（のデータ）を独占するべからず』という非常にグレーな決まりはある。たとえ期間限定の気まぐれであったとしても、実は今付き合っているのは俺ですなんてことは、到底言えそうになかった。

「人虎のインスタ、削除されてます！」

「あ……？ ああ、本当だな。なんだ、依頼が嘘だつてばれちゃったのか？」

「まだ全部保存してないのに！」

「タイピング悪すぎだろ」

「おのれ人虎！ どこまでも僕に歯向かうか！」

今日の目玉であった人虎のインスタグラムが急にアクセスできなくなってしまう、はあ……と落胆の声が上がる。わざわざ劇団員の女まで雇ってこの計画を進めてきた芥川は面目を潰され、怒り心頭という表情だ。放っておくと人虎を襲撃しに行きかねない。後でフォローしておこう。

「まあ……ちようど良い時間だろ。そろそろお開きとしようぜ。さっきの写真を保存してた奴は、互いに交換してやれ」

「芥川先輩！ 私、あのアカウントが投稿した画像はすべて自動ダウンロードするように設定しました！ 自宅の端末に全部残っていると思いますす！」

「……本当か」

「でかした、ひぐつちゃん！」

「YDK！ YDK！」

「わ、わいでいーけー？ って何ですか？」

「やればできる子」

「嬉しくありません！」

「……樋口、よくやった」

「芥川先輩……！ ありがとうございます！」

やれやれ、これで樋口も面目躍如だな。芥川から褒められ感極まって泣いている彼女を見て、今回も良い会合になったと思った。今日この場で言うべきか迷っていたことがあったのだが、やはり黙っておくことにした。

「じゃあ、俺は先に出るわ」

「お疲れ様でした。おい樋口、中原さんの車を誘導しろ」

「ああ、いいって。今日はもう帰らせたんだ。ちよつと歩きでえ気分だな。樋口、後でデータコピーさせてくれ」

はい、と頭を下げる樋口の横で、芥川が何か言いたそうに俺を見ていたが、わざと気づかない振りをして会議室を後にした。すぐに来た下りエレベーターに乗り込むと、扉が閉まる直前に俺の後を追って滑り込んで来る。

「どうした？」

「恐れながら、それは僕の台詞かと」

どうかしたのですか、と芥川が俺と同じ質問を投げかける。いつも会合の最後には俺から少し締め言葉のようなものを話してから出ていたから、違和感を感じたのだろう。俺も、おさむくんファンクラブを一からここまで盛り上げてきた芥川にだけは話しておきたかったが、果たしてそれをあいつが望むのかと言えば、きつと望まないだろうと思った。

「……大したことじゃ、無えんだ。ただ……」

言葉に詰まってしまう。芥川は何も言わず、エレベーターの扉が開いても、そのままじつと続きを待っていた。

「ただ……あいつに、太宰にはもう、『人間失格』を、使わせないでやってほしいと、そう、あいつらに言うつもりだった」

「……なにゆえ」

「それは言えない。言えないし、きつとあいつは望まない」

「……そうですか」
やっがれ

僕だけは覚えておきます。芥川はそう言って、深々と頭を下げた。俺一人を下ろしてエレベーターの扉が閉まり、階数を示すランプがゆっくりと上ってゆく。

「……本当に出来た部下だよ、手前は」

イヤホンを耳に入れ、音楽プレイヤーをコートのポケットに突っ込んで歩き出す。

時間を忘れて騒いでいたので、外はすっかり暗くなっていたが、高島町のガード下を通つてとちのき通りを突っ切ると、年中点灯している街路樹のイルミネーションが眩しい。

耳元で、今日の昼間に編集したばかりの音声データが再生された。さっきの会合で出そうと思つて携帯端末でぎゅぐゅ編集しておいたのだが、出すタイミングを失つてしまった。

人虎のインスタの威力がそれだけ凄かったのと、今付き合つてゐる奴がいるだのいないだのという話題に怯んで出しにくくなつてしまつたからだつた。

〈ねえ、逃げないで〉

〈キスの嵐に吹かれるくらい、受け入れてよ……〉

「……あ、ああ……ほんと無理……」

耳が孕む。何だよこの美形にしか許されない台詞。

意図的に名前の部分は削除したが、これが俺に向けて吐かれた睦言だなんて、俺自身が一番信じられない。

実際に付き合いたいかと聞かれたらそれはなんか違う、と言つていた女性メンバーの気持ちに共感する。太宰から恋人になろうと言われて嬉しくなかつたわけではないが、嬉しいという気持ちより、今の録音しておけば良かったという気持ちが先に来た。キスをされると頭が沸騰して、わけが分からなくなつてしまふが、そのときの気持ちも、愛されて嬉しい、ではなくて、顔が良すぎて無理、近い、無理、なのである。

そもそもが、あいつがマフィアを去つた後に芽生え、一度も会わずにいた四年の間に生い茂つた感情なのだ。それ以前は、ただのムカつく陰険工作野郎としか思つていなかった。

離反直後、各地の拠点にある監視カメラに映り込んだ太宰の映像や、ヤツが指揮した作戦の資料など、太宰治に関するあらゆる情報をまとめて隔離しておくよう命じられた。軍警の目に触れない場所に置いてくれれば良い、何なら処分してしまつても構わない、中也君に任せるよ、ということだった。気乗りしなかつたが首領ボスからの命令とあつては仕方なく、時間を見つけては太宰のデータを収集し中身をチェックするということをしていた。そうしていたら、気付いてしまつたのだ。こいつ、めっちゃくちゃ顔が良いな……と。

当時のある日、まだ肩書きが準幹部であった自分の作業部屋で、守衛室から持ち出してきた監視カメラの映像をチェックしていた。太宰が受付嬢と談笑している映像を見ていたら、遠慮がちに扉がノックされた。

「ご無礼をお許しください。この部屋から、太宰さんの声が聞こえた気がしたのですが……」

そう言っただけで現れたのは芥川だった。芥川は、自分を組織に引き入れた人間であり直属の上司であった太宰が消えて以来、任務はそつなくこなしていたものの、本来の厳酷苛烈な性格がなりを潜め、ただでさえ細っこい身体に幽霊のような表情を貼り付けて、無気力になっていた。

「よう、暇なら手伝っちゃくれねえか。首領^{ボス}の命令で太宰のポンツクが置いて行ったものを片付けていてな。一人で集めるのは、結構骨が折れるんだ」

「……太宰さんのためならば、喜んで」

当時は意識していなかったが、奇しくもこの日は太宰の誕生日であった。まだ二人しかいなかった、おさむくんファンクラブ誕生の瞬間である。

モリ・コーポレーションのビル内に設置された監視カメラ映像のチェックから始まり、会議の録音音声、構成員の名簿、組織に関わる事件の発生時に資料として撮影された現場写真に映り込んだ姿、それら一つ一つを、芥川と感想を言い合い

ながら確認した。芥川が二階にある通信保管所の管理者権限を引き継いだので、集めたデータはその隠し金庫に保管した。かつて協力関係にあった敵対組織が太宰をカラオケ接待に呼んだことがあるという情報を入手したときには、二人で喜び勇んで襲撃に行った。結局太宰はそのとき一曲も歌っていなかったことが分かり、腹いせにそのアジトは燃やした。その頃には、芥川も以前の調子を取り戻していた。

太宰が再び横浜に姿を現してからは、陰ながらヤツを慕っていた連中も騒ぎ出し、あそこの喫茶店で見たとか、隣の川を流れていたとか、太宰さんを乗せたタクシートの運転手は三日以内に消えるとか、様々な噂話が聞こえてきた。

それだけみんな飢えていたのだ、と思った。俺と芥川だっただけだ。四年も新しい情報がない中、既出のネタを何度も繰り返し見返して、もはや写真ならばそれを使ってカルタができそうだし、映像ならばよその組織のモブの台詞までアフレコできる。そんな風に慎ましく楽しんでいたら突然、新情報が連日のように更新されて、貧しい村に慣れていた俺たちは供給過多でどうにかなくなってしまっただけだった。

しかしこの横浜にいると分かったからには、日々更新される1分の1スケール太宰治の情報をもっと欲しい。そう思った俺と芥川は、太宰のファンの中でも口の堅そうな奴を選んで少しずつ声をかけていった。

そいつらにとつては、逆に自分たちの頭の中にしかなかった過去の太宰治の映像こそがお宝で、それが見られると聞くと二つ返事で参加してくれた。幹部に昇格した俺の執務室に集まって騒ぐにはだいぶ大所帯になってきたので、基本月に二回、外のレンタルスペースを借りて鑑賞会をセッティングするように、現在に至る。

彼らの尽力のおかげで、二人だけでは到底収集しきれない今の太宰の姿を追いかけることができている。今日だって、あの正装の太宰の顔の良さときたら……画像を買って来たので、今夜はこれを自室のテレビに映してワインを飲もう。たまには白もいいな。たしか、シャルドネもいくつか置いてあったはずだ。

久しぶりに、緊急用のセーフルームではなく、自分のメイソンの住居として買つてあるマンションに帰宅した。ロビーにいますコンシェルジュの女が俺に気付いて一礼する。ぼんやり考え事でもしていたのか俺が前を通るまで気付かず慌てた様子だったが、このマンションが雇っている民間の女だし、別に咎める気などない。イヤホンを外して軽く手を振り、エレベーターホールへのゲートロックに鍵を差し込んだ。

二十七階の廊下だけは、壁が柱を除きほぼ全面ガラス張りとなつており、横浜の海とみなとみらいの夜景を一望できる。内見に訪れたとき、こりゃ外から狙撃し放題だなと思ったが、

それがどうにも面白くなつてしまつて、ここに決めた。ポートマフィアのビルも目と鼻の先にある。有事の際にはすぐに首領^{ボス}の元へ駆けつけられる距離というのを第一に探していたので、理想的な物件と言えた。

「……来客か」

部屋の前まで来てドアノブに触れようとしたとき、室内で人間が動く気配を感じた。どうやら、何者かの侵入を許してしまつたらしい。最後に施錠して出たはずのドアが、そつとドアノブを回したただけであつさり開く。

不法侵入の常習犯野郎の顔が浮かんだが、あいつとは昨日会つたばかりだ。二日も続けて俺に会いに来る理由は無いらう。となれば、俺に殺されても文句は言えねえシチュエーションでわけだ。

顔を上げたままで銃撃に備えながら、ゆっくりと玄関を跨ぎ、バスルームとトイレの気配を探った。ここに潜んではない。奥のリビングには煌々と明かりが点いていた。お待ちかねつてわけかよ。いい展開になつてきたじゃねえか。

撃つなら撃つてこい、と気を研ぎ澄ませながら扉を開ける。キッチンにもソファにも人の姿は無く、部屋の奥のカートンだけが風に揺れていた。それが、ひととき大きな風にはためて、バルコニーの塀に凭れて煙草を吸っていた男の姿を現した。

「おかえり」

「……………太宰、手前かよ」

危ない。危なかった。つい、さっきまでのノリの延長で、キヤーとか言ってしまうようになったのをぎりぎりのところで飲み込んだ。元相棒、双黒、犬猿の仲、俺は太宰が嫌い、俺は太宰が嫌い、俺は太宰が嫌い…といつもやっているマインドセットで内心を悟られぬよう表情を作る。いつもは鏡の前で小一時間これをやってから会いに行っているのだが、今はうまくできているだろうか？

「どうやって受付を通って来たんだよ…つか、人の家で窓開けて煙草ふかす奴があるか。煙が入るから閉めろ」

「住人がヘビースモーカーなのに何を今更。君、この部屋に帰るのは久しぶりだろう？ 気を利かせて先に換気しておいてあげたのだよ」

「手前には換気の定義から教えた方がいいみてえだな…」

「あの受付のお嬢さんには、適当に作った偽の名刺を渡して、中原さんのオーダーで来たんだけど良かったら今度君もどうぞって営業かけたらあつさり通してくれたよ」

「一応聞くが、どういう名刺だ…」

「出張ホスト。の、えっちなやつ」

引越そうかな。いやだめだ、賃貸じゃなくて買っちゃったんだ。次に帰ってくるときにあの女がクビになっ

ていることを願う。

「来るなら来るって一言言えよ。酒はあるけど、あとは簡単なものしか出せねえぞ」

ストックの缶詰と乾麺で、トマトとアンチョビのパスタでも作るか。あとはピクルスとナッツとチョコレート、ドライフルーツがあつたはずだ。

キッチンの方へ向きかけた背中に、寒いなあ、と独り言のような声がかけられた。そんな格好で外に出ているからだろう、いつものコートはどうした、また川に流されたのかと、笑いながら振り返った腕を取られて、バルコニーで抱き締められていた。海からの潮風がびゅうと吹いて、首筋を太宰の髪がくすぐる。

「……………だぞ、い、待て、くっ」

「靴？ 履いているじゃない」

本当だ。侵入者をとっ捕まえてボコるつもりでいたから、靴を脱がずに入って来てしまっていた。

「ちなみに私はここに置いてあつたサンダルを拝借したよ。

靴は玄関の靴棚。コートは、君の寝室」

行こう、と掴まれたままの腕を引かれる。この部屋は、リビングと寝室と書斎の全ての掃出し窓がバルコニーで繋がっていて、簡単に行き来できる。できてしまふ。

「飯が。腹が減って」

「いないよ。私はね」

「いや、その、俺は少し……」

「なら、どうして何も食材を買ってきていないの」

「それは……」

ハイ、詰んだ。なんだ、俺はこんなに嘘の下手な男だった
だろう？ もともと言葉を使うことにおいては太宰と対等
に張り合おうなどとは思っていないが、今日は特に、太宰の
纏う空気に容赦がなく感じられる。少し考えてから、呆れな
がら、仕方ないなという風に言葉を返すのではなくて、捕虜
を尋問するときのように間髪入れず退路を奪っていく口調。
まるで時間が惜しいというような。

「何か……あったのか？」

表情から何か読み取れないだろうかと太宰の顔を見上げる
と、ふいとその視線から逃れた。寢室の窓を開けて俺に背を
向けるのを、靴を脱いで追いかける。

「なあ、そうだよ、昨日の今日で俺に会いに来る用も無いだ
ろ。何があった。まさか、また身体が——」

太宰は側にあったベッドに腰掛け、両手で頭を抱えて俯き、
深くため息をついた。俺もコートを脱いでその隣に腰を下ろ
す。すると、太宰は頭に添えていた手を降ろして、俺の手の
上にそっと重ねた。

「ねえ……一部の宗教が偶像崇拜を禁じる理由が分かるかい？」

「……は？ なんだそりや、謎かけか？」

「いや、ただの雑談だよ」

「俺はそういうのは詳しくねえけど……あれだろ、人間が作っ
たものは神の本質ではないから、それを崇拜するのは間違っ
ているっていう……違ったか？」

「模範的な回答だね。間違いではないよ。でも私はね、もっ
と単純に、神様がいやがるからやめろ、って話だったんじや
ないかと思うんだ」

そんなことがどうして分かるんだよ、と、さして興味もな
い話題だったが、ただ素朴な疑問でそう尋ねた。太宰は顔を
上げ、まっすぐに俺を見つめる。

「だって、自分の方を見ないで、虚像ばかり見ていたら、
さみしいじゃないか」

どのくらい外にいたのだろうか。重ねられた唇は冷たく、
自分の部屋から盗まれたものと同じ煙草の匂いがした。

耳を弄びながら、舌先で唇をめくり、ここを開けろと歯列
をなぞる。その舌の温度は唇の冷たさに反して熱く、尖った
犬歯を躊躇なくこじ開けて、奥に隠れていた俺の舌をつかま
えた。絡め取られて呼吸の仕方を忘れる。後頭部を大きな手
で掴まれ、さらに口付けは深くなり、脱ぎ忘れていた帽子が
ぽんと落ちた。

「だ……さい、ちょっと待つ……」

「……逃げないで、って、私は何度も君に言ってきたけれど」
離れてくれたと思った唇が、唾液で濡れたまま俺の耳朶をくちゆりと食んで、そのまま直接声を吹き込まれる。

「今夜は逃がさない。私に抱かれてよ、中也」

悲鳴を上げて脳細胞がいくつも破裂した。声が良すぎる。こいつの、声が良すぎる。抗えない。逃げ出そうにも、腰から下が粉々に碎けてなくなってしまうみたいになるで力が入らなかった。

やっぱり駄目だ。自己暗示が足りない。今のは、気障なこと言ってんじやねえよって、あざ笑って蹴り飛ばしてやらなきゃならない場面だった。白いシャツのボタンを外されて、鎖骨を舐められたら、そこが毒を塗られたようにじんじんと痺れる。くっ、と噛み殺したような笑いを落として、太宰はなんとも意地の悪い眼差しで俺を見ていた。

「なんだ…君がそんなに私のことを好きなのだと知っていたら、こんなに待ったりしなかったのに」

「なに…てめえ、調子にのってんじや——」

寝台に倒されていた俺の頬に、ひたりと太宰の両手が添えられた。息がかかるほどの距離でじっと見下ろされる。

「私に逆らうの…?」

「さ、さか、う……」

「ん……? どうしたの、中也」

だから顔が！ 顔と声が！ 良すぎる！ 頭の中のおさむファンがやかましくて憎まれ口が出てこない。

自分の太腿に点々とキスマークを付けながらスラックスを脱がしてゆく太宰を、どこか画面の向こうの出来事のように夢心地で見つめていた。えらい。こんなえらい映像を、自分だけが一人で見ていて良いのだろうか。

俺は、あいつらに怒られるだろうか。おさむくんはみんなのもの、という掟があるのに、会員番号一番の俺が率先して抜け駆けしたりして。かといってこんな、腰骨に歯を立てられて息を乱す俺と、「中也…」と砂糖を煮詰めてどろどろに溶かしたような声色で俺を呼ぶ太宰のデータを、どう切り貼りすれば、どんな言い訳をすれば、誰かに見せられる？

「また、他のだれかのことを考えているの」

「……? 何のことだよ」

浮気でも疑われているのだろうか、と思った。あんまり焦らしてきたから、他に本命がいると思われているのか。

本気じゃねえのは、手前の方だろうか。と、それが当たり前で、別に何の気なしに言った。俺とのことは一時の気の迷いで、一度ヤッたらこんなもんかと気が済んで、また胸と尻のデカイ女をテイクアウトで喰い散らかすんだろうが。だから俺は……俺は？

俺は……太宰を独占したいと思っっているのか？

「……随分ない草じゃない。あんな恥ずかしいものを聞かされた後だもね、この際言ってしまうけど、先に本気になったのは私の方だよ」

全然気づかなかったでしょ、君は組織の犬だったから、と言いながら、俺の腹筋を固アいと文句つけつつ撫でさすり、平らな胸に付いた乳首をまるで苺のふさをつまむようにして捏ねくり回す。そんなところをいじられたって何にも起こらねえよと何度も言ったのに、まあまあ、といったい何がまああなのか、酔った弾みの延長のようにいつもしつこく弄り倒されてきた。

「……っん」

ひく、と喉仏が震えたのが分かって、ちりちりと胸が痒くなってくる。なんだ今日は、なにかおかしい。つうか、いま俺は、こいつに何を言われたんだ？

あ、と思わず声が出たのに驚いて手で口を押さえると、その手首をすぐに掴まれて、革の手袋をするりと外され、掌に優しく口付けられた。

「中也、掌にする接吻の意味、知ってる？」

「……お願いのキス」

「……うん、正解だけど、お願いって。かわいい言い方するなあ。まあ中也なら知ってるよね。昔っからこういう気障なことが好きだったから」

私はそういうところ、嫌いだった。と、話しながら、太宰は俺の指を囁んで遊ぶ。

「だから君のその手のカッコつけ発言は悉くバカにしていたのだけど、今思えば、あの頃にもうこうやって口説いていたなら、とっくに付き合えていたのだろうね。毎日任務で人を殺して、帰りにホテルで血を流してセックスして、ああ、惜しいことをした。十代の生意気な中也、ぶち込んでめちゃくちゃに泣かせてあげたかったなあ」

「……おまえ、俺のことが、すぎだったのか」

「そう言っているように聞こえない？」

「だったらなんで、……おれの、車を爆破したりしたんだ」

「車を爆破したいくらい好きだったのだろうね」

「いや意味がわからねえから!」

「犬には難しいのかな?」

じゃあ仕方ない、と言って、太宰は俺の足を片方肩に担いで身体を寄せ、腰を密着させてきた。柔く勃起上がりかけていた自分の性器の上に、その倍も熱くて硬いモノが押し当てられる。けだものにはこういうのの方が分かりやすいよね、と言った太宰の顔は、口調の穏やかさに反して瞳がぎらぎら光っていて、犬などより余程凶悪な獣に見えた。

「ほら、君があんまりおあずけするから、もうこんなになっちゃった。早く中也のナカに、出したい……」

下着越しに感じる熱さと、吐息交じりの太宰の声に、喉がカラカラに渴く。男同士のやり方くらい、自分だって知識としては知っている。太宰と付き合うようになってから、こっそり自分で指を入れてみたことも。だけど、こんなものが身体の中に入ってきたら、俺はどうなってしまうんだ。

「だ……ざい」

「ん？ ……なあに？」

「その……なんつか、俺は…後ろは、初めてだから…」

「ああ。うん、やつぱりそうなんだ。嬉しいな」

会話が通じていない気がする。いや、わざと通じていないふりをしていやがる。今日は、遠回しに拒否しても許してはもらえない雰囲気だった。

「だからその、今日いきなりつてのは…また日を改めて」

「そっか、分かったよ」

「ああ、手前の言い分も分かるが……えっ？」

分かったって言ったか？ 今夜は逃がさないと言ったのに、いや、別に、残念な気持ちなんてない断じて。あんなデケェもん入るわけがないのだ。だけど、こんなにあっさり引き下がるれるとは思わなかった。

「だけど、流石にこの状態じゃあ帰れないかな」

ちよっとそこで見ていてよ、と言って、太宰はペンダントの付いたループタイを引き抜いた。ベストも脱ぎ捨て、シャ

ツのボタンを二つ外す。ベルトも外されて、続けてズボンのジッパーがゆっくり下げられていく音が、静かすぎる寝室に生々しく響いた。

「お、おい…見てろって、まさかここで…」

一人でおっ始める気かよ、と、続けるつもりでいた言葉は、ボクサーパンツに押し込められていたものが取り出された瞬間に生唾と一緒に飲み込んでしまった。

「そのまま……脚を開いていくれる…？」

すぐに済むから。そう言って、太宰は手で自分のペニスを握り込み、ぐしぐしと上下させながら、俺の下着の膨らみの、その奥にある場所を、じつと凝視している。

下着を脱いでくれない…？ それは命令ではなく、切なげなお願いだった。目の前でここまで曝け出されて、その程度の頼みも断れるわけがなく、羞恥に燃えそうになりながら、おぼつかぬ手つきで片足ずつ下着を脱いだ。

自分で自分の有様を見ていられなくて、二つの膝を合わせて手で隠し、視界に自分の下生えやら何やらが入らないようにと顎を引いて、薄目で太宰を見ていた。

どうしても、太宰からは目を逸らせない。だってこんな姿、俺は一度だって見たことがなかった。露出した性器はもちろん、男の下半身を見ながらチンコを抜いて、息を荒げている太宰の姿なんて。

「は、あ。……入りたい」

そう、無意識にだろうか小さく呟かれた声に、女でもないのに見えない場所が濡れたような感覚に陥った。

「……………か」

「…え？ なにか…言った？」

「……触って、やろうか」

焦れたような熱っぽい眼差しが上を向き、きつと同じ色をしている俺の瞳とかち合った。

「いいの…？ こわくない？」

「…なにが怖えんだよ。同じものが付いてるつつうの」

そうだけど、でも、とやたら気遣わしげな態度を取られるのが居た堪れない。生娘みたいに扱うんじゃねえよ。いや、実際初めてには間違いないし、気を遣わせている原因は俺にあるのだが、仮にも恋人で、ベッドの上に二人でいるのに、何もできずにグラビアのモデルよろしくただ座ってオナタ提供しているだけの状況は嫌だった。

こいつは、十代の頃から、俺のことが好きだったと言う。

それが本当なら、俺とこういうコトをする妄想も、一度や二度ではなかったのだろうか。気づかなかったでしょ、などと言うが、毎日毎日が、軽口、嫌み、嫌がらせのオンパレードで、どうやってたらそんな可能性に行き着いたというんだ。俺と二人きりでいたとき、電子遊技場で待ち合わせたとき、

張り込みが続いた夜、夜明けまで飲みながら作戦暗号を考えていたときも、こいつの頭の中で、俺は、どんな格好をさせられていたのだろう。

いいから、と、ごちゃごちゃうるせえ口を口で塞いで、嘔然としている顔を小気味よく見送りながら、太宰の脚の間に潜り込む。すでに先走りて濡れていたペニスが、持ち主の手より少し小さな俺の手の中でぐちりと音を立てた。

どうせなら、もう少し、驚かせてやろうか。

処女ならしうがないって気遣われていたのがやつぱり癪で、手の中でどくどくと脈打つその太いものをひと思いに口の中に含んでやった。ちょ、と慌てた声が頭の上から降って来て、ざまあみると、太宰に溢れた唇の端だけで笑う。

「もう、無茶するなあ……」

「うふへへお、あわっおえ」

「何言ってるかわかんないし」

本当にかわいい。すき。そんな爆弾発言を、俺が顔を見ていないタイミングで言われてしまう。

口の中を太宰の雄がぬるぬる滑って、ただ上下にしゃぶっているだけで、ディープキスをされている最中のように口内の粘膜を刺激される。ああ、だめだなんかこれ、俺の方まで感じてしまう。

自分の頭上で太宰が軽く身体を捻り、ベッドの下から何か

を取り出した。そんな所に何か置いていたのだろうか。フェラの最中に煙草を吸う趣味でもあったのかと、顔を上げようとしたら、上から髪をくしやりと押さえつけられ、優しく、けれども抵抗を許さぬ力で喉の奥まで咥えさせられた。

「そのまま続けて。…すごく気持ちいいよ、中也」

「……う、むぐつ…」

こいつ、分かっててやってんのか、と思うくらい、的確に腰にクル声音で囁かれて、処女どころかあばずれのように、後から後から唾液が溢れて止まらない。ぐちゃぐちゃと湿った水音が自分の口の中からも耳の外からも反響する。

その、外側から聞こえていたものは太宰の濡れた指先だったことを、自分の後ろに触れたことで気が付いた。

「なっ、に……うぐつ……」

「だめ。爪は切ってきたけど、暴れると怪我しちゃうよ」

今度は本気で頭を押さえつけられていた。つん、と鼻腔をカウパーの匂いが駆け抜ける。舌の上の窪地に太宰の先走りを垂らされている。…うそだろ、そんなことで、いきそう。

気が付けば独りでにシートに自身の性器を押し付けていた。おしりが揺れてるね、と楽し気に笑う声をする。

さっき取り出したのは、こういうコトをするときのためのローションか。ぬめった太宰の指が後孔を刺激して、それを繰り返されているうちにずぶずぶと侵入されてしまう。

一人で処理するつもりじゃなかったのかよ、なんて責めるのも馬鹿馬鹿しかった。俺は寢室にローションなんか置いた覚えはない。つまりこれは、太宰がこの部屋に来たときから描かれていた筋書きであり、俺が愚かだったってことだ。

「思ってたよりすんなり入るね。中也、もしかして一人で練習してくれてたとか？」

「うっせ……………しね」

ふふ、と上機嫌に指が増やされる。腹が圧迫されて気持ち悪い、のに、身体の内側から変な場所をぐりぐり押されて、排泄感とシートに擦り付けているペニスの射精感がごちゃまぜになつてしまう。精子が底からせり上がってくる。

いつのまにか押さえつけられていた頭は解放されていて、拙い呼吸を許されていた。目の前には振り返った太宰の雄があつて、亀頭からだらしなく垂れていた先走りを唇で舐め取ると、そのえぐい味を舌が認識したと同時に身体がびくびくと痙攣して、シートを汚してしまった。自分の身体の中で、太宰の指の形をはつきりと感じた。

「私のを舐めてイッちゃったの？ ……最高」

こんなに大きくしてくれちゃって、痛い思いをするのは君なのだよ？ とまるで俺のせいみたいに言う。

「…気遣ってくれる気があるんなら、そんなこわいもの入れないで、今夜も優しくしてくれ」

「同じものの付いてるから怖くないんでしょう？ それに、優しくされたらされたで、癪なくせに」

隠せない。氣遣われるのが嫌な性格も、本当は、本当に、抱かれるのがこわくてびびってるんだってことも、太宰から与えられるもの、すべてに悦んでしまうことも。

再び仰向けに押し倒され、指が出て行った喪失感でひくつく後孔にぶっくり膨らんだ亀頭が押し当てられた。ずぶ…とそれが自分のナカに飲み込まれていく光景が、あまりに淫靡で生々しい。見ていたくないのに、目が離せない。

「ああ、そうそう。言い忘れていたのだけだね」

こんなときに何だ。碌なことじゃなさそうだと俺は思った。

「私、今日の日中、中也のことを盗聴してた」

「……………？ ……………は、」

俺の表情がさーっと蒼褪める様子を満足そうに眺めると、太宰はひと息に腰を進めた。

「あ、あっ！」

「きつつ……………きもちいい……………」

指で探られて知られた性感帯の全部が、熱くてべとついた肉棒によって摩擦されて感電する。

ローションだけではたぶん無くて、もうすでに、こいつの鈴口から溢れたものが俺の中に注がれている。身体中の毛穴が開くのが分かる。唇がわなないて、息もできない。

さつきイッたばかりなせいなのか、初めてなのに、死ぬほど感じる。それどころじゃない、絶対にばれてはいけない秘密がばれてしまったらしいのに、理性が今にも飛びそうで、もっと「もっと…」突いてくれと「突いて…」熱病におかされたように、それしか考えられない、馬鹿になってゆく。

一際強く打ち付けられて、歓喜の悲鳴をあげて仰け反った。腰を掴まれ、ばんっばんっと容赦なく突かれる。雁首がイイところに当たる。きもちいい、もうだめ、いやだ、気が狂いそうだ。そこまで感じなかったはずの乳首を舌で転がされ、きつく歯を立てられたら、あん、あ、と女のように身を振って悶えてしまう。

「……………少し君の気持ちも分かったかも。……………かわいいすぎ」

「は、あ、ださい」

「うん……………なあに」

「あんま、さわんな。手前にふれられたとこ、ぜんぶ、あ」

「……………はは。そう」

君ってとんでもないんだね。

そう零した掠れた声はちよつと困っていた。

俺はもうわけがわからなくなっていて、身体の中のどこか擦り切れたような感覚もあつたのに、痛いよりも熱い、きもちいいということばかりが先に来る。太宰はどうなのだろう。少しは、イイ思いをできているのか。そんなことを思ったが、

何も知らないのに、できることなんて何もなかった。ただ魚のように揺れて、快樂の深みに落ちてゆく。

「はっ…いきそ、う。ねえ…全部、出してもいい…?」

かろうじて聞き取れたその問いかけに、足を絡めることで応じる。ぐ、と堪える顔すらも、美しかった。

「やつぱり、もっと早く君を抱いておけばよかった」

悔しまぎれのように囁み付かれた。ああ、おれが、こいつとのキスで駄目になってしまうのは、きつと知らぬうちに調教されていたんだ。咥内を舌で掻き回されて太宰の顔が滲むいく、と頭の中だけで思ったのか、口の中で告げたのを食べられてしまったのか、それすらも分からなかった。

「あっ! うぐ…あ、やめつ、んん…!」

「…だめ。ちゅうや、何度も…言ったよね…?」

逃げないで、つて。

そんなことを言われたって身体の中にこんなこと、起こったことがなかった。腹の中がじわりと熱い、何かで満たされていく。吐きそう。涙と鼻水と、涎も出ている。太宰が腰を引き、また奥を突いて、ぐちゅぐちゅと泡立つ音を聞きながら、その背にしがみついていた。

いてて、と俺に引っ掻かれて洩れた呻き声は、ちつとも痛そうには聞こえず、むしろ無邪気な少年のようににはにcanで、嬉しそうだった。

「……………おい」

「はあ、気持ちよかった…どうかした?」

「次からゴムつけろよ。なんかこれ…慣れねえから」

「んー…………」

「おい」

「うーん……………わかった、善処するよ」

こりや着けねえぞコイツ。次からは自分が用意しておくしかなさそうだ…:…ってなんだそれは、あたかも俺の方がやる気満々でいつでも準備万端って感じじゃねえか。

「もう二度としないって言われるかとも思っていたのだけど、『次』の話をしてくれるなんて、嬉しいね?」

「……………あほか。常識の話だ」

こっちの気も知らずそんなことを言う男を呆れた目で見つめながら、俺は、もうなんか何も考えたくねえなあ、と現実逃避していた。

情交の後、太宰は俺をバスルームへ連れて行き、いやだやめろ一人できると大暴れする俺をいいからいいからと宥めすかしながら、ナカに出した精液を掻き出し、湯舟に入れた。「ねえ中也、次があるなら、リクエストしたいのだけど」

「いやだ」

まだ何も言っていないじゃない、と太宰は笑って、シャワーで自らの頭を流す。濡れた髪をかき上げながら同じバスタブに入ってきたので、男二人分の体積でぎばぁんと溢れた。

「……包帯、したまま入るやつがあるかよ」

「私のこと、今度は名前で呼んで欲しいのだよねえ」

「無視すんな。……何だって？」

「そっちこそ、いま聞こえないふりしたでしょ。昼間は呼んでくれてたじゃない？ 治の顔が良すぎる、って」

なんなのあの恥ずかしすぎる会は。バスタブの縁に頬杖をついて、太宰は俺をじつと見つめた。

やつぱり夢じゃなかったか。セックス中に見た幻覚だったらしいな〜と思ったが、まあそんなわけではない。今日の俺の行動を盗聴していたということは、全部聞かれてしまったということだ。おさむくんファンクラブの会合を。

「スピーカーにしてたから、あの時間帯、探偵社にいた全員が聞いてて、私めちやくちや恥ずかしい思いをしたのだけけど、敦君なんて途中で椅子から転げ落ちて、『巻き込まないでください』って書いてたブラカードを折っちゃってね、見事に巻き込まれたわけだよ。あれはなかなか趣深い光景だった」

なんだそのブラカード。こいつは普段後輩にどんな思いをさせているのか。

「あの時、アカウントが消された理由はそれか」

「アカウント名、そんなにダサイんでしょか……って聞かれて困っちゃったよ。私、ああいうのやらないからよく分からないし」

「お、教えてやろうか……？」

「嫌だよ、君たちにネタ提供するだけじゃないか」

「言い値で払うぞ」

「あのさあ、本人が目の前にいるのだけど!?」 他のお嬢さん方と芥川君はともかく、君は何やってるの、第八十五回って言ってたよね？ 私がマフィアを抜けてから毎月やってたとしても多いよ？」

「基本月二回で、抗争中はしばらく集まれねえときもあるけど、忘年会と新年会もあつから……」

「想像以上に活発だった……」

太宰はがくりと項垂れて、お湯をぶくぶくと泡立てた。とにかくねえ、色んな意味でショックだったから。そう言っても顔を上げると、濡れて解けた包帯の先が、するすると湯の上を漂い始める。

「ショック？ 一部は気付いてて無視してたんだろ？」

何にせよ今この場で、俺一人の独断でクラブを解散しますなどと約束させられるわけにはいかない。掟の一つを破ってしまったこともある。全員を集めて事情を話すまでは、適当に話を逸らしてうやむやにしなければと思った。

「そうだね、撮られていると気づいたこともあったよ。でも、まさかあんな使われ方されているとは思わないじゃない。それもそうだけど、恋人が、『実際に付き合うのはナシ』みたいな発言をしていたことの方がショックだったなあ。そのあたり、弁明してくれる？」

そんなこと……言ったか。言ったな。

「あれは……なんつうか、俺は、自分でも思うんだが、太宰治をこじらせてるつつうか、手前のいない間、手前の残したもののばかりを追いかけてたから、実際こうして付き合うなんてことは全く想像してなかったんだよ」

「だから、私から告白されたとき、よく分からないまま受け入れたということ？」

「まあ……そういうことになる」

「成程ねえ……それで、あの会の存在とか、私と君が付き合ってるってことは、森さんは知ってるの？」

「首領^{ボス}は会の存在は知らねえ、と思う。俺たちの関係については、どうだろうな……俺から話したことはない」

ふうん。と相槌一つだけを返し、太宰は黙った。もっと色々追及してくるかと思っただが、ファンクラブを即刻解散しろとも、太宰を恋人として好きなのかどうか分からないまま告白に応じたことを反省しろとも言わなかった。また自分の頭の中にだけ浮かんでいる点と点を繋げているんだろう。

そういえば、首領^{ボス}の名が出たので思い出したが、俺はいつから聞き出さなければならなかったのだった。

件の抗争を仕掛けてきたチャイニーズマフィアの生き残り、そのうち本国へ帰還せず今も横浜に潜伏している奴等の人数と、武装や異能力を含めた特殊技能などの戦力の情報を。

「……ところで、昼間の会話を聞いていたんなら知ってたんだろうが、うちはこないだの抗争でだいぶ怪我人が出てな」

「負傷者百三十八名、死亡者五名、だったっけ？ ポートマフィアが常に徹底抗戦の構えを崩さず、横浜の交易ラインを死守してくれていたことを考えると、限りなく最小限の被害に抑えたと思うよ」

なぜうちの被害状況をそんなに詳細に知っているのかと、聞かずとも答えは『盗み見られたから』以外にない。やはり探偵社の抱えている電網^{ハッキング}潜りの方が腕は上か。

「そりやどうも。そちらさんも、あれっぽっちの人数で随分釣り上げたらしいじゃねえか。何匹いったよ？ うちより多かったら、それこそショックだぜ」

「何してくれる？」

「……………あ？」

「だから、情報を渡す見返りに、君は何してくれるのって聞いているの。知りたいんでしょ？ 探偵社が捕らえて警察に引き渡した正確な人数を」

相手に気取られず情報を引き出したいというときに『ところで』なんて話し出すのは論外だよ、昔教えたじゃないか。

太宰は俺の赫い髪の先つちよをくるくる指に巻き付けながら、そんな昔話をした。

「教わった覚えは無えけど」

「えー、言ったよう」

「バレちまってんなら世間話はやめだ。あいつらの残党、その人数と戦力について掴んでいることを教えろ。見返りは、その全員をポートマフィアがぶっ潰してやることだ」

「それじゃ意味が無いねえ…私には」

しょうがないな。交渉の下手すぎる中也のために、私から条件を提示してあげよう。

そう言って、太宰はいやに熱の籠った溜息を吐き、男二人入るには狭いバスタブの隅へと俺を追いつめた。首筋に吸い付いて、髪の毛が口に入るのも構わずに、襟足を舐める。

「っ、おい…何のために風呂に入ったと…」

「最後までではシないよ。事後の君を見ていたら、なんかムラムラしてきちゃって」

触らせてよ、と興奮を隠さない声にも、湯の中で悪戯してくる手つきにも、俺が逆らえないことを知られている。

二人とも、それなりの経験を済ませてきたい大人になっているはずなのに、どうしてこんなに煽られる。

「っひ、ん……」

ペニスの先端をゆるく刺激されて、太宰の肩に顔を押し付けて耐えていたら、だめ、聞かせて、と叱られた。

初めてなんだぞ、せめて明日、と我ながらその場のしが過ぎるなと思う逃げ口上を吐いても、さっき初めてじゃなくなっただじゃない？と逆に喜ばせてしまう始末。

「それに、私はいつも、明日死ぬかもしれないって思っ、やりたいことはその時にやることにしているから。えっちなことも、中也への嫌がらせも全部」

だから明日までなんて長くは待たないよ、と言った男の肩からはトレッドマークの包帯が解け落ちていて、赤黒く変色した皮膚が露になっていた。どれも古い痣だ。まるで錆びた銅のように貼り付いている傷痕。

「……ほんとに手前は、生き急ぎの死にたがり野郎だな」

「あれえ？ 中也、私の趣味が心中って知らなかった？」

もう少し恋人のことを知ってくれてもばちは当たらないよ、と、あたかもエロで頭いっぱいですみたくない顔して俺の唇を舐めたので、そうだな、そうすることにすると答えてキスを返した。のぼせる前に出ようぜとだけ付け加えて。

素直だねと訝しむ声を、ほざいてろと受け流した。

実際、おまえの言う通りなのだ。

中原中也は、太宰治をあまりにも知らな過ぎていた。

「……無効化じゃ、ない……？」

それはどういう意味だ、と質問した俺の表情を見て、武装探偵社の女医は、まずいねどうも、妾^{あたし}としたことがしくじっちゃまったようだ、と黒髪をかき上げ嘆息した。

「あいつもアンタを腐れ縁と言っていたし、当然知っているものだと思ってたんだが」

「嫌味なら聞いてやる。だが、その前に話せ」

大きな抗争が終結し、三泊四日で退院した俺の元に、太宰が負傷してはまだ目覚めていないという情報が入った。首領^{ボス}の承諾はあっさりと降り、俺はその日、武装探偵社の医務室を訪れていた。

太宰の異能力について、俺は自分こそが一番よく知っているとばかり思っていた。自らの異能の特性上、切りたくても切れない深い相互関係にあるものだと。

異能力『人間失格』——触れた対象の異能力を無効化する能力。それに例外はないとヤツは言っていた。蘭堂の旦那も欧州にも存在しない究極の異能力だと評していた。何度もその力を目にして、今更知らないことなどないと思っていた。

「……異能力は、神様か誰かがくれたギフトじゃあない。その力を使うとき、必ず何らかの代償を支払っている。重力使用の中原中也、あんたもそれはよく分かっているはずだ」

与謝野晶子。異能力の中でも極めて稀少な治癒の能力を有する世界大戦時の伝説、死の天使。首領^{ボス}が組織に欲しがっている人材として、彼女の情報は頭に入っていた。

「妾^{あたし}の異能力『君死給勿』によって、死の運命から戻されるとき、患者は瀕死の苦痛と恐怖を味わう。本来そこにあったものを、なかったことにするんだ。タダつてわけにはいかないだろ。太宰の能力も同じ理屈さ」

「あいつは、直接触れないと、無効化できない……」

「そんなもんが、代償だって？」

馬鹿を言うんじゃないよ、と言って、与謝野は回転式の丸椅子に腰掛け、バインダーに留められているカルテを眺めた。医務室の白いカーテンの奥には、今も昏睡状態にいる太宰が眠っている。

「あんた、どうやって今回の抗争を終わらせたんだい。それを可能とするのに、どの程度の代償を支払った？ 太宰の奴がいなきや、あんた死んでいたんだろう」

そうだ。今まで何度もそうしてきた。俺が汚濁を使うのを止めるなどと言って、太宰が止めたことは一度もない。あいつがマフィアにいた頃は、本気で暴れた後、気が付けばいつも

同じ顔に見下ろされていた。気持ち悪いからやめろと言って
も毎回自分の膝の上に乗せやがって。でも、太宰の顔が苦痛
に歪んでいたことなどなかった。初めて出会ったときから変
わりばえのない包帯まみれのツラで片目だけニヤつかせ、
おつかれ中也、おなかすいたね、と言うのだ。

再会後に初めて汚濁を使ったときは、次に目が覚めたとき、
太宰はいなかった。骸骨での一件のときも、氣を失ってから
再び目を開けたら、そこにいたはずの奴はいなくなっていた。
もうあの頃とは帰る場所が違うからだ、自分の中ではそう
解釈していた。

「あいつは……どんな代償を払っているんだ」

知っているなら教えてくれ、と言っても返ってこない答え
に、頼む、と言葉を重ねて、頭を下げた。

与謝野は動かないベッドのカーテンをしばらくの間黙って
見つめ、数秒目を閉じてから、机の上にカルテを置いた。

「太宰は……ウィルス系の異能力者だ」

「何を、言ってる。ウィルス系ってのは……プシュキンの野郎
が使ったようなやつだろうが。太宰の能力とはまるで」

「太宰の『人間失格』は、発動している異能力に触れること
で、その異能力の性質をウィルスに変換し、本来の形として
発動させることを不可能にする。そして、変換したウィルス
は、太宰の体内に取り込まれる」

あたし
妾とあいつはよく飲み比べをしていてね、と与謝野は話す。

「何度目かの飲みの席で、珍しく酒に飲まれて言ってたよ。

私は、異能力とは宿主の持つ『傷』だと思う。触れて無効化
する度に、その人間の傷を体感し、理解するんだ。こんなに
痛くて、苦しいのに、どうして皆、明日も生きていようなん
て思うのだろう。私には、ちっとも共感できない……」

何を女々しいことを言ってるんだい、って蹴り飛ばしてやつ
たけどね。彼女はそう言ってるんだい、って蹴り飛ばしてやつ

もし、その話をされたのが俺だったら、同じことを言えた
だろうか。あの手の平で、幾度と己の傷を肩代わりされてい
たと知っていたとしても、なお。

「……ひどいツラだね。一応言っておくが、今更あいつにお
かしな態度を取るんじゃないよ。そんなことを太宰は望まな
い。そのくらいは分かるだろう？」

「……………ああ」

「この話をしたのは、森医師せんせいが太宰のやつを連れ戻したがつ
ているからさ。澁澤の一件を覚えているだろ、異能力という
『傷』は、宿主の所へ還りたがるもんなんだ。一度太宰に取
り込まれても、宿主が生きていればやがて元の持ち主の中へ
と戻る。だが、宿主が死んでしまった場合は、そのまま太宰
の中に留まり、体表面にも痣となって残る」

あの包帯は、それを隠しているのだと与謝野は言った。

「あんた達マフィアは、敵に回った人間をすぐに殺す。あそこで『人間失格』を使い続けたら、太宰の傷は増える一方だ。どんなに変人だろうと肉体と精神は人間のものだからね、許容量を超えれば壊れる。それは、^{あたし}妾の能力でも治せない」

与謝野は丸椅子から立ち上がり、太宰を寝かせているベッドのカーテンを開けた。

「おや、やつと顔の痣も消えたねえ。そろそろ起きそうだ」

「顔のアザ……?」

「そうさ。これもこいつを酔い潰した夜に聞いたことだが、同じ異能力を何度も無効化した場合、痣が現れる場所はその対象によって決まっているらしくてね。『マフィア時代は中也のせいです』と顔の右半分を隠してなきやならなかった」ってばやいてたよ。……えらく嬉しそうだったが」

折角来たんだ、病人を見舞っていきな。

そう俺に言っつて、与謝野は検温だけ済ませると、医務室を出て行った。後には俺と、静かに寝息を立てている太宰だけが残される。

「なんで……黙っていやがった」

俺が汚濁を使うのを止めるなと言っつて、太宰が止めたことは一度もない。俺が汚濁で吹き飛ばした奴等の中には、当然異能力者も含まれていた。太宰が『人間失格』を使って応戦していた奴も。

再会したときには、太宰の顔の包帯は外れていた。探偵社なんてヌルい場所に行ったから、自殺趣味が原因のもの以外の生傷は減ったんだろうと思っていた。

いつも包帯をしていたのは、俺にこの秘密を隠すためで、二度俺を置いて行ったのは、顔に現れる痣を俺に見られないようにするためだったのか。

「……ふざけんじゃ、ねえよ」

俺の呟きはとても小さなものだったが、ベッドに横たわっていた太宰は微かに身じろぎし、眩しそうに薄目を開けた。

「……ん、中也? あれ? どうしてここ、に……」

おかしい態度を取るなど言われたことを、早速守れていなかった。やつとお目覚めかよ、冷やかに来てやつたんだよ、そう言えばいい、いつもみたいに。分かっているのに、候補の台詞が一つも口から出てこない。

「……ねえ、中也。私たち、恋人になろうか」

それは汚濁を使った後、いつも俺の顔を覗き込んでいたときの表情だった。予想もしていなかった言葉にますます何も言えなくなってしまった俺の様子に苦笑いして、太宰は自分を見下ろしていた俺の頬へと手を伸ばし、尋ねた。

「答えを聞かせてくれないの……?」

思わず耳を塞ぎたくなるくらい、切なく優しい声だった。

第三話　もしも明日死ぬのなら

「例の残党は一名で潜伏していると。それはまた、随分舐められたものだねえ、我々マフィアも」

モリ・コーポレーションの中央棟の最上階にある、ポートマフィア首領、森鷗外の執務室で、俺は昨夜太宰から入手した情報を報告していた。誰からどうやってその情報を得たのかということはごっそり省略して報告したのだが、首領はその点を一切追及せずに聞き、壁一面のガラス窓の外に広がるみなとみらいの風景を眺めながら、成程ねえ、と呟いた。

「首領、これは推測に過ぎませんが、俺はこの一件、特務課が一枚噛んでいと思っています」

「うん。私も同感だね。彼らはこと情報の扱いに関してはプロフェッショナルだ。且つ、恥ずかしながら我々が今回金で雇った電網^{ハツカ}潜りはお世辞にも有能とは言えない。もし彼が本当に特務課の情報を盗めたというのなら、とうにその生きた証ごと、この世から消し去られているだろう」

だが、これは逆に考えれば、彼らに貸しを作っておく良い機会かもしれないね。そう言って、すうと目を細めた。

それはどういう意味かと尋ねることはせずに、首領^{ボス}の目が語るものを読み取ろうとただ見つめた。うちが特務課と絡む

展開には、あまりいい思い出が無い。何らかの取引をするのなら、交渉の場で会うことになるのかもしれない教授眼鏡の辛気臭え顔が脳裏に浮かんた。

「エリスちゃん、そろそろお片付けしなさい。今日はお天気が良いから外でランチにしよう」

「ジェラートが食べたいわ、リントロウ」

「それはデザートだよ。でもかわいいから許しちゃう！歩いてイタリアンのお店へ行こうね」

首領^{ボス}が執務机の上に手を置いて席を立ち、外套を羽織る。話の間、絨毯の上に寝そべってお絵描きをしていたエリス嬢は、色えんぴつとノートをおもちゃ箱の中に仕舞い、靴を履き替えると言って衣装部屋の方へと消えた。

「小さな子でもあしてお片付けが出来る。箱から飛び出した鉛の兵隊をいつまでも片付けられずにいるとは滑稽なことだ。優しい我々が、代わりに眠らせてあげるとしよう」

おもちゃのチャチャチャ、つて童歌だよ、知ってるかい、と尋ねられたのに首を振る。

「俺はそういうのはあまり…申し訳ありません」

「いや構わないよ。ああそうだ、時に中也君。君は、一部の宗教が偶像崇拜を禁じている理由を知っているかな？」

「……は、え、ええと……？」

「なに、ただの雑談だよ」

なんだこのデジャブは。唐突な質問に、首筋からどばっと冷や汗が出たような気がした。

「……か、かみさまが、いやがるから……でしょうか、ね？」

「おや。中々良い答えをするね。分かっているのなら余計な口出しはやめておこう。いまだ戦火の残り火の燃える中、子供達を教会に集めるのは危険だよ。そのことだけ、注意しておいてくれればいい」

黄色のエナメルの靴に履き替えて衣装部屋から戻って来たエリス嬢を「可愛いよエリスちゃん〜！」と首領が手を叩いて迎える。俺は二人が連れ立って出て行くのをエントランスまで見送った。

……これ、絶対バレてねえか？

太宰と付き合っている事実を悟られているというだけでも憤死モノだというのに、おさむくんファンクラブのことまで首領に知られているとなると、この先首領からまた「太宰君戻って来ないかなあ」なんて話を振られた時にどんな返しをすればいいのか分からない。

いっそ、「はい！　そうですね！　あの野郎が戻って来たらビル内のカメラを倍に増やして年一で密着特番を組みます！」という感じに聞き直ってしまえばいいのだろうか。ヤケクソ気味にそんな妄想をしたが、三ヶ月前に探偵社の女医から言われた言葉が蘇り、すぐに頭の中から打ち消した。

ここに戻れば、太宰が『人間失格』を使った敵が大勢死ぬ。そうなれば、あいつはますます傷だらけだ。それを続ければ最悪、死んでしまう。

太宰が、死ぬ。あいつが、死ぬ……？

難解な記号のようだ。具体的に想像しようとしても、足元にぽっかりと黒い穴が開いたみたいに、意識が遠のいていく。我に返らせてくれたのは、樋口からの着信だった。

「……おう、どうした。珍しいな」

「芥川先輩が今手が離せないものですから、僭越ながら私から連絡させていただきました。本日のファンクラブ臨時招集についてですが」

「悪いな、昨日の今日でまた急な調整を頼んじまって。樋口、手前は芥川のためについてきているだけだったのに」

「そつ、そんなことは、ああありません！　ワタシモオサムクンダイスキデス」

「棒読みじゃねえか……まあ、いいけどよ」

実直な樋口が太宰のようなタイプに魅力を感じないことは誰の目にも明らかなのだが、肝心の芥川が樋口からの入会希望を素で喜び、「上司として貴様の審美眼を誇りに思う」とまで褒めちぎったので、今さら実は太宰に毛ほどの興味も無いなどとは言いだせないのだろう。不憫だが、芥川の非公開放予定を共有し、同行できるだけでも嬉しいらしい。

彼女のその芥川への感情は、どういふ『好き』なのだろうか。憧れの上司か、異性として付き合いたいのか、俺たちが太宰に向けているような『推し』なのか……聞いてみたくなつたが、俺が立原だったならいざ知らず、立場的にセクハラになりそうだなと思ひ、やめた。

「ちょうど今から夕方まででしたら、全員横浜駅周辺に集まれるようです。昨日と同じ会場が取れましたので、場所はそちらでよろしいでしょうか？」

「ああ、問題ない。俺も今から向かう」

それではお待ちしています、と言つて電話は切れた。ガタガタと物音がしていたので、先に行つて急いで準備をしてくれているのかもしれない。

今日は楽しい上映会つてわけにはいかないと思うが、話はずいてからだ。車で向かうことにし、俺は運転手が待機している秘書室へと足を向けた。

「うふふ、ふふ、うふふふふ……」

まだ空の明るい刻限からこんなに爽やかな気分ではられないのは初めてだ。だからといつて仕事に精を出すわけではないが、デスクに頬杖をついてぼうっとしているだけで楽しい。

「……おい太宰、先刻から気持ち悪いぞ。また変な物を食つたんじやないだろうな」

敦がいないのだから、誰も貴様の奇行には付き合わんぞ、と言ひながらも、国木田はパソコンのキーボードを打つ手を止めて厭そうに私の様子を見ている。

敦君は今日の昼過ぎまでとある事件の捜査で県外の遊園地へ行つてゐる。鏡花ちゃんも一緒だ。二人とも生まれてこのかた遊園地という場所へ行つたことがないと言うので、社長が二人分の経費を先方に捻じ込んだらしい。せっかくなら任務の後に残つてそのまま一日中遊んで来たらしいと言つたのだが、報告のため帰ると言つていた。真面目なことだ。

そんなわけで、今はオフィスに大人達しかいない。

「ねえ、国木田君。『太宰今日は機嫌がいいな』つて言つて」

「ああ……？ 太宰、今日は、機嫌がいいな？」

「やっぱりわかるうう……！？ そうなのだよ！ 今日私は頗る機嫌が善いのだ！ どうしてだと思ふ……！」

まずつた、と顔に出して、国木田が近くにいたと謝野さんと乱歩さんに助けを求める視線を送つたが、二人とも素早い動きでその辺にあつたファッション雑誌と豆菓子に付いてきたお面で顔を隠し、あつさり国木田を見捨てた。

「どうせ、また画期的な自殺方法を思ひつたとかだろう」

「ああ……惜しい！ でも半分正解！」

「どうしよう…鬱陶し過ぎる……」

「何だい困った顔をして。そんなに難解だったかな？　しょうがない教えてあげよう！　実は私、昨夜ついに中也と一線を越えたのだよ！」

そうだと思った…と呟く声がどこかの席から聞こえた。

「あ、ああ…？　そうか、それは良かったな…」

「ヨかったなんてもんじゃないよ！　例のおかしなクラブのおかげで、中也が私の顔と声に弱いということがよく分かったからね、それを利用して口説いたのだよね！　そうしたらちよつと囁いただけで腰砕けになっちゃつてもう可憐い！　今時、押して駄目なら引いてみるなんて古典的な作戦に引かかるのは中也くらいだと思うよ、怖いなら無理しなくてもいいよって態度を見せたらなんと口でシてくれたんだよ！？」
神様だとは知っていたけど、実は天使だったのかも？　ああもう早く帰りたい、帰つてもう一回抱いてから死にたい」

キスばかりしていたせいか、すっかり口の中が敏感になつてしまった中也、私のを舐めてるだけで感じて射精した中也もつと突いてと懇願した姿も、身体のだこに触れても震えて身を振った姿も、全部が全部いやしかった。あの痴態だけで何度でも抜ける。

「なんか、昨日の連中とノリが同じじゃないかい…？」

「元マフィアだからなのかもね」

「マフィアって皆さんこんなにお元気なんですね！」

「賢治、お前は聞くな。おいコラ太宰！　女性社員もいる場で猥談はやめろと昨日も言っただろうが！　セクハラで訴えられるぞ！」

「やだなあ、国木田君。こういう稼業をやつてセクハラだなんて訴えてくる人はいないよ。優しく無視をしてくれるか鉈を持ち出してくるか紅茶に毒を盛るかしてくれる」

「無視してもいいなら、俺もそうさせてもらうぞ。おい賢治、ラジオをつけろラジオ！　身内の夜の事情など聞くに堪えん」

「夜の事情！　なんだいそれは、実に破廉恥で素敵な響きだ」
賢治が彼の席の近くに置かれている箱型の大きなラジオを点けると、ローカル番組の街頭インタビューが流れてきた。

明日世界が滅亡するとしたら何をしますか？というインタビューからの質問に、声だけ聞くと三十代半ばと思われる男性が、アイドルを侍らせていちゃいちゃして過ごしたいです、と答え、おまえ馬鹿じゃねえのと側にいる同年代の男性たちからの笑いを買っている。

うわキモッ…とその場にいた女性陣の声がハモる。その反応を見ていた国木田が手帳に何かメモした。

「へえ、私はちよつと分かるなあ、こういうの。もしも明日死ぬとしたら、最後に好きな子と好きなコトをしたいよねえ。……あれ？　ナオミちゃん、私のお茶の色、変じゃない？」

あらお気になさらないで、と全然答えになつていない返答をしつつ、彼女は事務所を訪ねてきた清掃業者に清掃箇所の説明をして、それが終わると谷崎の隣に座った。

「私も同感ですもの。世界が減ぶその日には、いつも通り、兄様と激しく愛し合いながら果てたいものですわ」

「い、いつもそんなことしてないだろう！　ちよ、ナオミやめなさい、今取引先にメールを書いているから、あつ」

いいなあ、職場恋愛つて。谷崎兄弟の仲睦まじい光景を眺めていたら、本来露ほどの興味もなかったはずのそんなことを考えてしまう。

中也から私に向けられているあの妙なベクトルの感情は、私が組織を抜けてから芽生えたものであるらしい。つまり、例えば過去に戻れたとしても、私の方から中也へのアプローチを変えない限り、付き合えてはいなかったということだ。

あの当時の自分が、そんな素直に振る舞うことなどできなかったと思うし、親密になればなるほど、自分の異能力の実態を知られてしまうリスクも高くなるからと無意識に一定の距離を保っていたところもある。

哀れまれるのは勿論、心配されるのも、鼠算式に彼が抱え続けていた『守るべきもの』の序列に加えられることもまっぴらごめんだった。異能の強さも、体術の格も、人々の中でただ生きていくことですら、日に日に明確に敵わなく

なっていく中で、私が中也を指揮し、私が中也を呼び戻し、私が中也を置いていくということは絶対だった。そうでなければならぬと拘り続けていた。

先の抗争で烏合の衆相手に張り切りすぎてしまったせいで意図せず秘密を知られてしまったが、あの情けない顔を見て悪態の一つもつかずに告白なんてできたのは、それだけ私が大人になりずるくなつたということかもしれない。

また同じ場所でも多くのものを守りながら戦う彼を見たら、きつと昔のようにいじめてしまうだろう。別の場所から茶々を入れて悔しがらせるくらいが丁度良いのだ。そういう意味では、私がマフィアに戻るのは当然ナシで、中也が探偵社に入るというのもナシである。設定不十分により、オフィスブレイの妄想すらできない自分の細かい気質が残念だ。

「ただいま戻りました」

「遅おい！　敦！　僕は今から君を断罪する！」

「はっ、えっ？　よよ予定通りの時刻ですけど……」

多摩の遊園地から山ほどのおみやげ袋を抱えて帰って来た敦を机の上に立って指差し、乱歩さんは声を張り上げた。

「……時間通り。この人は、悪くない」

「鏡花、僕は君に話しているわけじゃない。敦、昨日の掃除当番は誰だったか言ってみろ」

「掃除当番？　昨日は、僕でしたけど……」

「そう、昨日の夕方、掃除当番だった君はここに置いてあったギョロボールの空箱を捨てた」

「空箱でしたから……」

「当たり前だったんだよ！ 金のホトケが出たんだ、確率は五百分の一、0・2%！ メーカーに送れば缶詰に入った玩具が送られてくる。だから取っておいたのに！」

「え、ええ？ だって他のスナック菓子の空と一緒に置いてありましたし、それに金のホトケってたしか前にも乱歩さん当たったことありましたよね？」

「時期によって送られてくる物が違うんだ！ 敦、君の罪は重い。罰として、この階の男子トイレの掃除を命じる」

敦はきょとんとした顔で立ちぼうけている。私を含め、誰も乱歩さんに異を唱えない様子を見て、鏡花ちゃんが「私も」と声を上げたが、君はこの件には無関係だと一蹴された。

「……そんなことで、いいんですか？」

「えっ」

「なんだ、そのくらいで許してもらえならすぐに行ってきますね。孤児院にいたころは一週間トイレに閉じ込められたこともあるので余裕ですよ！ 報告書は後で書きますね！」

よく確認しないで捨てちゃってすみませんでした！と朗らかに笑って敦は廊下へ出て行った。思わぬ闇を引き出してしまった……とその場にいた全員が乱歩さんを見る。

「僕は悪くないよ！」

「いや、大丈夫、分かってます……」

「じゃあなんでそんな目で見るのさー！」

「おーい！ 何度呼ばせるんじや！ はよ出んか！」

事務所内が妙な沈黙に包まれたとき、国木田のパソコンから花袋さんの声が聞こえた。国木田が指で合図すると、賢治がラジオを消す。

「すまん、さっきから太宰の馬鹿とラジオがうるさくてな」

「途中からは私じゃなくない？」

「統報じゃ。残党の男の名は、亜木冬彦。元、異能特務課のエージェントで、三年前に特務課を辞め、その後消息不明となっていた」

「国外へ逃げて、チャイニーズマフィアに拾ってもらったってわけだね。お仲間に入れてもらえるだけの能力は持っていたってことだ。異能力者でしょ？」

「ああ。昨日途中まで話した通り、異能力者であることは間違いない。じゃが、その能力の情報は特務課のデータベースからは抹消されていた。逃亡先で働き始めてからの目撃情報と、本人の過去の発言からある程度は推測できるが」

その男は、特務課での仕事に入職当初から不満を抱えていたらしい。異能力者をうまく使って国の治安を維持することが使命だと思っていたのに、毎日やっていることは監視、監視、

監視ばかり。異能を使って事件を解決するのは軍警の狗どもに任せきりで、これでは才能の持ち腐れだ、と市内の飲み屋で管を巻いていたところを店の従業員に目撃されている。

「……乱歩さん、どう思います?」

「分かっているくせに聞くなよ。まあ、名探偵の僕は昨日の報告の時点で気づいていたけどね」

「どういう異能なんですか?と賢治が首を傾げて尋ねる。

「亜木冬彦の異能力は、人間を使役すること。精神操作系の異能、若しくは肉体の自由を奪い、意のままに動かすことだ」

「たった一人でこの状況を覆えると思っているのだとしたら、おそらくは同時に複数名を操れると思っていでしょうね」

「…そんな強力な異能者を、特務課の連中は手放したのか? 守秘義務を欠片も守れない男だったようだが、野放しにするには危険すぎるだろう」

「さあ、その辺の経緯は彼の履歴書の退職理由でも読まないといけないけどねえ、この一件、私たちが『おつかい』を期待されているのは間違いなさそうだ。私たち武装探偵社と、ポートマフィアもね」

異能力の詳細に関するデータは綺麗に消しておきながら、市内での、それも数年前の目撃情報が出てくるなどお笑い草だ。私たちがこの推理に行き着くよう誘導されている。

「生かして引き渡せば、貸し一つにできるかもね」

「当たり前だ。武装探偵社は無用な殺しはしない」
「ああ、そうだった。それじゃ、そろそろ行こうか?」

私がコートのポケットに手を入れて立ち上がると、追跡の準備は出来てるだろうな、と国木田が花袋に念を押す。花袋は「阿呆」と返し、「小僧がどのアトラクションに乗ったか全部言ってやれるぞ」と言った。

国木田と連れ立って廊下の先にある男子トイレに行くと、敦がデッキブラシで黙々とタイル床を掃除していた。さっき事務所に来ていた清掃業者の男は、雑巾で洗面台の鏡を磨いている。私たちに気づくと、頭に被っている青いキャップ帽を脱がぬまま、軽く会釈した。

「いやあ、すみませんね。うちの若手がかえって作業の邪魔をしていますか?」

ちよっと仕事でミスをしまして、これが我が社の方針なものでして。と話しかけると、男は水で絞った雑巾を洗面台の上に置き、いいえ、助かりましたよ、と答えた。

「それにしても、随分と厳しい会社さんですね。今時、新人に便所掃除をさせるなんて」

「そうなんですよ。何度もお願ひしているんですけど、こればかりは社長の方針でね。自分たちの使う場所は自分たちで磨け、って。ちよっと前時代的だと思います?」

男は、じり、と後ずさった。そこにいた敦にぶつかつたが、敦は何も反応せず床を擦り続けている。

「確かに、他の階のテナントは業者を使っていますがね、このフロアだけは我々が自分たちで掃除しているんですよ。で、一つお尋ねしたいのですが——おまえは何者だ？」

男が作業着のズボンのポケットに手を入れた。それを見ていた国木田が即座に手帳の頁を破り、鉄線銃を構える。次の瞬間、それまで黙々と掃除をしていた敦がデッキブラシを放り投げ、男を庇うように立ちはだかる。

「今日は厄日だねえ、敦君」

目を爛々と光らせ、みるみる虎に姿を変えていく敦に、手を伸ばす。だから、せめて午前中は楽しい任務に行ってもらおうと思っていたのだよ。筋肉隆々とした太い腕が振り上げられたのをかわし、その腕をぐつと掴んだ。

「変身が…解けない？ おい太宰、真面目にやれ」

「……やっているんだけどねえ」

虎は唸り声を上げて、さらに強い力で私の手を振りほどき、男の襟を喰えると、自らの背に乗せた。

男はその場にキャップ帽を脱ぎ捨て、勝ち誇ったように高笑いをする。

「ハハハハハ！ そんなことでおれの異能力『傀儡^{くぐい}の糸』は破れないぞ、特S級犯罪者、太宰治！」

「おや？ いつから私はそんなに有名人になったのだろう。最近ファンクラブまであるようなのだよ。君も会員？」

「太宰、ふざけてる場合か！」

「誰を手駒にしようかと思っていたら、まさかあの『人虎』を寄越してくれるとはな。探偵社が間抜け揃いで助かつたぜ」「この口調からして、あと九頁くらいで死にそうじゃない？」

「太宰やめろ、本当のことを言って刺激するな！」

「貴様等…おれに支配される駒の分際で！ フン、まあいい。すぐに兵は集まる。貴様等全員、おれの前に跪かせてやるかな。必ず後悔させてやる」

楽しみに待っている、と捨て台詞を残し、男は虎の爪で切り裂かれた壁の亀裂から飛び出して行つた。また管理会社と下のテナントから苦情が来る、と国木田が眉間を押さえる。

「まあ、ぼやいても仕方ないさ。敦君の後を追おう」

特務課からのお使いもあるからねえ、と言いつながらトイレの個室の扉を一通り開けて中を確認する。個室の一つの床に赤い糸が落ちていた。さすがに拾う気にはなれなかつたので、写真だけ撮っておく。それは個室の壁にそってぐるりと一周する形で放置されており、先と先が小さな玉で結ばれていた。「……なーんか、いやな予感」

どうした行くぞ、と急かす国木田に応じて、私は手に持っていた携帯端末のアプリをカメラからGPSに切り替えた。

＊ ＊ ＊

「よかったですね幹部！ 積年の片思いが実って！」

「尊い」

「昨日焚きつけてみた甲斐がありました」

「むしろ他の女より全然良い」

「それな」

緊張して臨んだ臨時会合の面々からの反応は、拍子抜けするほど明るいものだった。

皆、俺からおさむくんファンクラブへの勧誘を受けた時点で、そういうことかと思つて陰ながら応援してくれていたらしい。そういうことって何だ、他ならぬ俺自身が無自覚だというのに、こいつらから見たら俺の太宰に対する感情は完全に恋愛感情のソレであつたらしく、早くくつつけばいいのになと思われていたらしい。死にたい。

「いや、確かに三ヶ月前から付き合つてはいるんだが、半分以上成り行きつつうか、すぐに飽きて他の女のとこに行くと思うから…」

「あーはいはい、成り行きでなんとなく、つてやつですね。心配しなくても、おさむくん女性関係全部切つてるじゃないですか。本命ですよ本命」

「ちようど三ヶ月前からだよな」

「意外に律儀な一面〜！」

「尊みが過ぎて直視できない」

「私は見たいです。今度、デート中の隠し撮り持ってきてください！ 掟破りの件は、それでチャラにしましょう！」

交渉の天才かよ。気にしていた『この会の存在を太宰に知られるべからず』という掟を俺の不注意で破ってしまったことを、俺と会つているときの太宰の隠し撮りを提出することを対価に赦免してくれると言う。他のメンバーたちもそれは良い案だと頷いた。

業務外の集まりとはいえ、ここにいる人間は全員がポートマフィアだ。一度決めた規則を破つておきながら、何の対価も無しにいいよいいよとは性分が許さない。正直、創立メンバーでありながら俺一人が除名となる可能性も考えていた。そうなれば、探偵社での太宰、オフの日の太宰、俺の知らない所で戦う太宰の姿を、俺だけが見られないことになる。そんなことは、とても耐えられないと思つていた。

「おまえら……すまない、感謝する。まさか、盗聴しているつもりが俺の方が盗聴されていたなんて、こんな失態を挽回する機会を貰えるとはな」

約束するぜ。必ず、おまえらが今まで見たこともないような治のとおきおきの姿を写してくるからな！

俺がそう宣言して拳を振り上げると、会場の全員が両手を天井高く上げ「やったー!」と叫んだ。なんて温かい奴等なのだろう。おさむくんファンクラブを作って本当に良かったの推しの素晴らしさを共有する喜び、推しを追いかけ続ける苦楽を分かち合う喜び、そして、困っているときにはこうして手を差し伸べてくれる。

「あ、芥川先輩……泣いているのですか……?」

「黙れ樋口。ここで泣かなくていつ泣くというのだ」

「芥川……」

俺は口元を押さえて嗚咽を嘔み殺している芥川の前へ行き、帽子を取って頭を下げた。

「……すまなかった。三ヶ月も黙っていたことを許してくれ。

手前は最初からずっと俺と歩んで来てくれたってのに」

「中原さん……頭を上げてください。僕は、^{やつがれ}太宰さんという師を失い、ずっと、老木の洞の中で眠り続けているような心地でいました。貴殿があの日、僕を^{やつがれ}招き入れてくれていなかったら、今もそこから動けずにいたでしょう」

「芥川ア……!」

「中原さん……ッ!」

固く抱き合い、互いの志を讀え合った。芥川の後ろで樋口が魂の抜けたような顔をして突っ立っている。太宰に興味の無い樋口にも、俺たちの情熱は伝わったのだろう。

深い感動に包まれる中、芥川は少し気恥ずかしそうに俺から離れ、「そういうえば、今日の武装探偵社は遊園地に行く任務があったようでした。残念ながら太宰さんは内勤でしたが」と別の話を振った。メンバーたちが一斉に食い付く。

「遊園地って、あそこのコスモワールドですか?」

「否。多摩市のサンリオピューロランドとかいう」

「サンリオ!! キティ耳のお土産とかないですかね!」

「太宰さんはマイメロだろ。赤頭巾の方が似合う」

「いや絶対クロミだ。クロミちゃんならきつと、太宰さんと一緒に悪巧みしてくれるし太宰さんのために泣いてくれる」

「また『黒の時代』過激派が騒ぎ出したぞ」

「アア……俺も二回殴られて五発撃たれてえな……!」

先程の感動も束の間、「赤だ」、「いや黒だ」という解釈の論争が始まってしまった。

「ああそうだ。今後の会合だが、^{ボス}首領が気になることを……」

例の残党を始末するまで、こうして集まることは危険だというような話をされていた。探偵社の情報では向こうは一人だということだし、仮に襲撃されたところでここにいるメンバーが遅れを取ることはないと思うが、^{ボス}首領から忠告された以上、無視するわけにもいかない。しばらくはオンライン会議にするかと言いかけたとき、タイミング悪く携帯端末に着信があった。特務課が使う番号の一つだった。

内容によっては機密扱いになる。というより、異能特務課が俺に直接電話してくるようなケースが、機密性の低い内容であるはずがない。

「続けてくれ。すぐに戻る」

その場で応答することはせず、携帯端末を持ったまま廊下へと出た。一階なら何のテナントも入っていないし、聞かれる心配もないだろうと思ったが、エレベーターで清掃業者のような作業服の男とすれ違ったので、用心して外へ出てから電話を受けた。

「やっと出ましたね、中也君」

「手前か、教授眼鏡。気安く呼ぶんじゃないよ殺すぞ」

電話の主は坂口安吾だった。特務課の参事官補佐であり、一時期はポートマフィア所属の諜報員でもあった男。

「手前には色々聞きたいことがある」

ポートマフィアを便利屋のように使おうってんなら——と話しかけた言葉を、その件は後にしてください、と、にべもなく跳ね返された。

「中也君、今すぐ其処から離れてください。あなたが彼の能力にかかったら、取り返しのつかないことになります」

「はあ？ そりや一体どういう……」

嫌な予感がした。それは予感としか言いようのないものであったが、俺は通話状態のまま急いで雑居ビルに引き返し、

さっきまで集まって話していた貸し会議室の扉を開いた。

「……おい、教授眼鏡。どういふことか説明しろ」

何も変わっていないかった。さっきまで話していた景色から何も変わっていない。芥川も、樋口も、他のメンバーも、同じ位置で同じ表情を貼り付けたまま無言で固まっている。

「あなたは動かないでください。ここから先は、武装探偵社がやってくれるはずです」

「聞こえなかったか？ 俺は説明しろと言ったんだ」

はあ、と受話器からわざとらしい溜息が聞こえた。通話を切らないあたり、話してくれる気はあるらしい。

安吾の話を聞きながら、車を停めさせているはずの駐車場へ向かおうと通りを歩き出した時、計ったようなタイミングで俺の真横に黒いベンツが停まった。いつもの運転手が降りてきて、後部座席のドアを開ける。

「優秀すぎて怖えな」

「は？ 何です？」

「手前のことじゃねえよ。いいから、その亜木なんとかって野郎の居場所を教えろ。追跡してんだろどうせ」

探偵社がやってくれるはずなどと、目の前で言われたらぶん殴っていた。亜木冬彦の持つ人間を役役する異能、それで操られたウチの連中を太宰が『人間失格』で止めたら、またあいつは傷を負ってしまう。

あいつらだって、そんなことしたくないはずだ。自分のせいで推しの身体に傷をつけるなんてことは。

特務課に貸しを作っておく良い機会だと言っていた首領^{ボス}の手前、探偵社に出し抜かれるわけにもいかない。

……なぜだか、しつくりこない。自分がいま何にこんなに苛つているのか、その理由としてはどれも違う気がした。

俺は……いや、今はそれを考えているときではない。いま俺がすべきことは、残党の男を捕らえること。それだけだ。

「先に待ち伏せしましょう。大体の場所は分かっています」

亜木冬彦が移動している道を教えてもらい、それを運転手に指示したとき、その運転手の男は正面を向いたままで俺にそう言った。

「……成程、彼の車に乗っているんですね。それならば、虎の少年の移動速度を上回ることも可能ですか」

車内の声を聞いていた安吾が再び諦観の籠った溜息を吐く。

「てめえ、最初から追いつけないと思って話していたな」

「あなたにはあなたの、我々には我々の目的がありますから。しかしこれ以上の干渉は不可能なようです。切りますよ」

「くそつたれのスパイ野郎。手前もいつか必ず殺る」

ではまたそのときに、と平淡な返しだけをして、通話はそこで切られた。何度話してもムカつく野郎だ。昔、太宰と仲が良かったというのが百篇頷ける。

「……おい、車は高い場所に停めろ。俺の運転手なら、手前の退路くらいは手前で確保しろよ」

はい、と相変わらずの不愛想な返事が返ってくる。

「……中原様は、一度も私に異能を使えと命じたことがありませんね。太宰様も、そうでした」

「ああ？ 手前の異能のことは書類で知ってる。使いどころがなかったただけだ。太宰の奴は、ありや黙って死なせてほしいから使わせなかった、の間違いだろうが」

手前の方こそ、今まで一度も太宰の話題を振ってくることはしなかったのにどうしたと尋ねたが、運転手は工事が滞り未だ瓦礫の残る市庁舎の方向へとただ車を走らせる。

「異能力に目覚めたのは、妻と子を事故で亡くしたときです。

私の異能は、自分が運転する車に乗せたことのある人物の危機を察知すること。察知するだけで、何ができるといいうわけでもないのですがね。しかしこの能力のおかげで、ポートマフィアに拾われ、先代の時分から重宝していただけました」

「そうか。……手前、今日は随分おしゃべりなんだな。手前の察知した未来では俺はそんなに酷いことになってんのか？」

「……中原様」

「何だ」

「……中原様」

「だから何だよ、ナビがバグったか？」

「太宰様を、よろしくお願いします」

「……ははっ、手前、あいつを心配してんのか！」

変人の方だったか。と俺が言うと、運転帽を被り直し、口元だけでシニカルに笑ったのが見えた。目的地に到着しました、と元のナビ口調に戻り、市庁舎区域で所々崩落している立体駐車場の屋上に車を停めると、いつものようにドアを開けて、恭しく頭を下げた。

屋上の隅まで歩く。足の下には、稼働していない工事現場と人気がない穴だらけの道路、折れた街路樹が転がっている。恐らくは亜木だけではない。意識を奪われている人虎も相手にしなくてはならないだろう。

「さあ、どこからでも来いよ。ブッ潰してやる」

まさかとは思ったけど、ドアの暗証番号が自分の誕生日だなんて。安直すぎるマフィアとその可能性を試してみた自分にげんなりする。

「どうした太宰、開けるぞ？」

「ああ、うん……まあ、中には誰もいないと思うけど……」

亜木を背に乗せて移動している敦をGPSで追跡した結果、私と国木田は西区の雑居ビルに来ていた。ここは昨日、例のトンでもファンクラブが会合を開いていた貸し会議室の入っているビルである。

その会議室のドアに設置されていたセキュリティロックは私の誕生日である数字『0619』を入力したら解除された。国木田が拳銃を構え、慎重にドアノブを回す。きい、と金属の軋む音を立てて扉が開いた。

そこにいたのは三十名弱の人間たち。芥川君、樋口という芥川君の部下、他にも私がマフィアに在籍していた時期に顔を見た覚えのある者ばかりだ。全員、つい今しがたまで何かをしていたというポーズのまま、時間が止まったかのように固まっている。

「……太宰、これは」

「うん……やつぱりそうだった。国木田くん、これは」

「時間を止めるストップウォッチあ痛っ!!」

「この馬鹿男ども、いかげんにしな！」

「や、やあ……与謝野さん、お早い到着で……」

「加勢に来てくれたのか、与謝野先生」

その場にうずくまって頭を押さえる私と国木田の前に立ち、使い込まれた金属バットを肩に掛けて与謝野さんは言った。

「ふざけてる場合じゃないだろ。敦は何処に行ったんだい」

私が室内の床に落ちている発信機を指差すと、やられたね、と嘆息した。亜木に気付かれて外されてしまったようだ。

「いや、そうでもないよ。私たちが追って来ることを見越してわざとここに捨てて行っただ。奴さんはやる気だよ。武器を揃えて、どこかで私たちを待ち構えているだろう」

「武器…?」

「ここにいる動かぬ兵隊たちさ。この部屋は奴の武器庫だ。

ご覧よ、ここにも探偵社のトイレに残されていたものと同じ赤い糸が張り巡らされている」

糸だっけ?と国木田がずれた眼鏡を直しながら部屋に入ろうとしたのを手で制止する。

「入っちゃ駄目だ。亜木冬彦の異能力の名を聞いただろう。

『傀儡の糸』：恐らくは、この赤い糸で包囲された範囲に立ち入った者の意識を奪い、任意のタイミングで操ることができるんだよ。二度も現場に糸を残して行っただことを考えると、この糸に私が触れても洗脳は解けない」

「亜木本人に触れなければ駄目ということか?」

「そうかもしれないし、あるいは…覚えてる? 国木田君が鉄線銃を構える直前、奴はポケットに手を入れていたよね。拳銃やナイフの類なら膨らみで分かる。きつとあそこには、この糸の元が入っていたんだ。Qの人形と同じ、異能力を発動させるための媒介となる何かが」

Qの名を出すと、国木田は呪いを受けて散々私に遊ばれたときのことを思い出し、苦い顔をした。

「推理はそのへんでいいだろ。太宰の話が真実なら、ここにいる奴等がいつ襲ってきてもおかしくない。敦を追うよ」

「ああ、そうだな…しかし、どうやって」

「それは大丈夫。そろそろ、私の優秀な牧羊犬が先に着いて待つてくれているはずだから」

携帯端末を出し、花袋に連絡を取る。すぐに出た彼に私は開口一番まくしたてた。

「花袋さん! ちょっと聞いてくれ給えよ、中也の奴が此処にいないのだよ! お人形さんのようにされてしまった中也を持ち帰って好きだけイタズラできると思っていたのにあんまりだ! さては安吾が助けたな、そうだそうに違いない、あいつ今度会ったらもう一回事故故らせて——」

持つていた携帯端末を国木田に奪われた。

「すまん、前にも言ったがこいつの言うことは無視してくれ」

「…そろそろ慣れたわ。中原の行き先を追跡しろと言いたいんじゃない。工事の中断されている市庁舎区域、中原の乗っている車はそこへ向かっている」

外にタクシーを呼んでおいたから使え、と言った花袋に国木田が礼を言い、電話を切った。まだ話してたのに、と言ったら、さっきと同じところを拳骨で殴られてしまった。

市庁舎区域で降り、タクシーが走り去るのを見届けると、それを待っていたように工事現場のゲートが開いた。中から唸り声を上げてこちらを威嚇する白虎と、それを引き連れた亜木冬彦が姿を見せる。

「いいタイミングだな、武装探偵社。ちょうど今、おれの駒も揃ったところだよ」

よく見覚えのある黒塗りの外車が八台、亜木の背後でぴたりと止まる。こちらが先に出たはずなのに、安全運転のタクシーでは追い抜かれてしまったか。だがそれも、乱歩さんの想定範囲内である。

「それは良かった。君の自尊心を傷つけたくはないからね、こちらフルメンバーを揃えてみたよ」

私たちの背後にあった景色がさらさらと崩れ落ち、そこに一台のトラックが出現した。『細雪』の幻像で車体を隠しながら私たちを追って来てもらっていたのだ。谷崎が運転するそのトラックの荷台から、賢治と鏡花が降りて来る。

「それが貴様の手駒か。粗末なものだな。こんな奴等に打ち負かされたとは、所詮異能力者など、正しい支配者に従わなければ有象無象と変わらない」

「君も異能力者じゃないか、亜木冬彦」

違う、と苛立った声音で亜木は吐き捨てた。

「おれは最強の異能力者だ。…太宰治、貴様にならおれの気持ちがかかるだろう。おれたちは支配する側の人間だ」

「支配、ねぇ……」

亜木の背後に停まっていた車からも、黒服に身を包んだ者たちが降りて来る。さっきまで彼の武器庫に保管されていたポートマフィアの人間たちだ。虚ろな目をした芥川がゆつくりと歩みを進め、敦と二人で亜木を挟み、立ちほだかる。

「支配したい、という感情なら私にも覚えはある。けれどね、自分を支配する側だと思っている人間は、その実、その対象に支配されているのさ。さて……君は異能に目覚める以前、いったいどれほど人に頭を垂れ、踏み躪られ、蔑まれてきたのかな。教えておくれよ、君の傷を」

亜木が何事かを喚き、ポケットから赤い糸の巻きつけられた木のノステピンを取り出した。彼の声が聞こえなかったのは、空から奇声を上げながら降ってきた犬がいたせいだ。

「——っ？ な、何だ！」

衝撃音と共に周囲のアスファルトが砕け散り、埃交じりの爆風がかき消えると、そこには赤い異能発光を纏った中也が立っていた。その場にしゃがみ込んだ亜木を護るようにして身構える敦と芥川を見ると、フンと鼻で笑う。

「おいおい、なんだこりゃ。三下が随分不相应なオンナを連れてるじゃねぇか。代金は高くつくぞ？」

「台詞のセンスが最悪。二点」

「ああ？　　んだとコラ！　　加勢してやろうつてのに」

「頼んでませ〜ん」

中也の身長に合わせて屈んでやり、挨拶代わりの口喧嘩をしながら、「糸を奪え」と、そっと耳打ちした。

「……たく、ムカつく野郎だ。あの三下をブッ潰したら次は手前だからな、太宰」

「おさむ♡って呼んでくれたら応援してあげなくもないよ？」

「ざっつっけん！　　誰が——」

中也は背後に襲いかかってきた黒獣の牙を素早く回避し、続けて突進してきた白虎の腹に拳を叩き込むと、その脚を掴み、芥川へ向けて放り投げた。芥川は咄嗟に『羅生門・叢』を展開して防御したが、虎の巨体に押され、数メートル先まで吹き飛ばされる。

「弱え。魂の無い獣は愛玩動物と変わらねえな」

「ん〜〜一点」

「いちいち五月蠅え！」

「貴様……ポートマフィアの、自分の部下だろうー！」

「知らねえよ、俺の知っている芥川はこんなに弱くねえ。ちなみに手前の後ろにいる俺の部下たちによく似た人形、そいつらの強さはそこでノビてる芥川より下だ。どうする、駄目元で試してみるか？」

兵隊を失えば逃げることもできねえだろうがな、と言つて中也が不敵に笑うと、亜木は「クソッ！」と叫び、私たちに背中を向けて走り出した。自身の重力を操作し跳躍した中也がたちまちそれに追いつく。彼らの足元に、なにか赤い模様が見えた。

「待て、逃げろ中也！」

もう遅い。と言つて亜木はけたたましく笑い、足元に予め用意していた赤い円の中で異能力を発動させた。次の瞬間、中也が矢で撃たれたかのように突然がくりと膝をつく。直前まで振り上げていた拳もだらりと下がり、仏蘭西人形のように小首を傾げた。

「は、は、ハハ！　　やったぞ！　　要注意監視リストの中でも最も危険とされていた異能力者の一人、『甲二五八番』をおれの駒にした！　　もう他のクズ異能力者など要るものか！　　こいつを使えばおれは横浜を、いや、世界を、も……？」

ず、ず、ず……と地面が底からうねり出し、大気が震え始める。両手を四つ足の獣のように垂れ下げたまま、中也がゆらゆらと立ち上がる。その手、首筋、頬、見える限りの肌の上に黒い紋様が浮かび上がった。

「君は救いようのない馬鹿だね。中也の意識を奪ったようだが、彼の意識によって抑え込まれている、もう一つの意識のことを知らないのかな」

「まさか……これは、ア、ラ、ハバキ……」

その場に尻餅をついて倒れ、ただ中也を見上げることしかできなくなった亜木の手元から、赤い糸の巻かれたノステピンが転がる。それはつま先を上げて待ち構えていた私の靴の下で止まり、異能の力を失った。

「国木田君、皆を避難させて。巻き込まれる」

これでマフィアにも貸し一つかな、と思ったが、意識を取り戻した樋口という女性が周囲を見回して即座に状況を察知し、芥川を担いで他の連中に車に乗り込むよう指示を出した。以前会ったときは爪の甘い女の子だと思っていたが、芥川君が絡むと頭の切れる一面を見せるようだ。

「敦を回収しろ！ 逃げるぞ！」

国木田の声で駆け出した賢治が気を失っていた敦を担ぎ、乗ってきたトラックの荷台に運ぶ。

「あんたも無茶するんじゃないよ、太宰」

「大丈夫ですよ。今夜は医務室のお世話にはなりません」

ああそうかい、と手を振って、与謝野さんが助手席の窓を閉めた。トラックは走り出し、中也が四散させる重力子弾を避けながら距離を取っていく。

「あ、あ、あ……たす、けて……」

亜木は目から涙すら流し、がたがたと震えている。

「だから言ったらう、支配されているのは君の方だと。命を

助けてもらえるかは、あそこにいる君の命の支配者に尋ねてみるといい」

ちなみに私は助けられないよ。つい数分前までは、マフィアを出し抜いて中也を悔しがらせることができるし、安吾に貸しを作るし、国木田君にも褒めてもらえそうだから生かして捕らえようと思っていた。

だが、私の中也を、ほんの一瞬の間であらうと、自分の欲望を満たすための人形にした。それで全く生かしておく気になくなった。やっていいことと悪いことがある、と国木田君もよく私に言っている。これは後者だ。

「今日はまだ言われてないけど、止めないよ、中也」

中也が生み出すブラックホールは、全て私を避けて周囲を壊し続けている。ああ、好きだなあ。口から血を吐き、笑いながら暴れ回る彼を眺めながら、そんな風に感じた。

中也を支配するのも、中也に支配されるのも、私一人でなくてはならない。ひと遊び終えて、体勢を崩した彼の手首を取り、一緒に帰ろう、と囁いた。

「ところで、手前には家族とかいるのかよ」

昔、太宰にそう尋ねてみたことがあった。

あのチートみてえな忌々しい能力の絡繰りが分かったなら、俺の重力操作で床にへばり付かせて、日頃の嫌がらせの数々を情けなく詫びさせてやれるのに。そう思ったのだ。

「馬鹿だなあ中也は。相手に気取られず情報を引き出したいというときに『ところで』なんて話し出すのは論外だよ」

理解してもらいたいなんで気持ち、もう随分昔になくしてしまった。だから君に話すことなんて何も無いよ。

太宰はそう言って、つまらなそうに本を読んでいた。まだ、俺たちが喧嘩ばかりしていた時代のことだ。

「……喧嘩してんのは、今も変わんねえか」

目が覚めると、見慣れたマンションのベッドに寝ていた。

汚濁を使って、ベッドの上で起きられたのはどれくらいぶりだろうか。あいつがまだ組織にいたころは部下が拠点の医務室に運んでくれていた。その後はいつも、砂利か土か瓦礫の上だった。

やはり慣れた自分のベッドが最高だ。気持ちいい。腰を中心にじわじわと熱くなって、頭がふわふわと軽くなってくる。盛り上がった布団の中から濡れた水音が聞こえてきて――

「つて、何やってんだ手前は！」

「はれ、ほはよう中也、おなかすいたね？」

「チンコ啜えながら言う台詞か！ いいから離せ！」

えー、と不満そうに言いながら太宰が俺の性器から手を離す。そうされてもなお、出来上がっちゃったそれは反り返り、張りを保ったままだ。

布団を剥がしたら、自分はボタンを全部外されたシャツ一枚だけの姿で、太宰も包帯以外は似たり寄ったりの姿だった。こいつは俺が起きなかつたらどこまでやるつもりだったのか。こんがらがったファン心理のせいで時々実は優しいのかもなんて勘違いをしてしまうときがあるけれど、太宰という男は性根がどこまでもクズなのだ。顔が良くて声も良くて頭も良いだけの、クズ野郎。

「もう、この状況については突っ込む気にもなれねえが……あの野郎はどうなった。俺の部下たちは」

「ファンクラブの皆さんなら、樋口さんの誘導で全員避難したよ。芥川君も無事だ」

「亜木冬彦は」

「死んだよ。君の重力が、跡形もなく呑み込んだ」

「……そう、か」

森さんに叱られちゃうのが憂鬱？と、上体を起こして両腕の間に俺を挟み、うつそり笑って太宰は言う。

言われてみればそれも確かに憂鬱だ。だが、教授眼鏡の方は探偵社に生かして捕らえて欲しかったのだろうから、そっちについてはざまあみろという気分である。俺が残念なのは何よりも、こいつに、自分がまた傷を増やしたことだ。

「……ああ、そろそろ出てきちゃったな。だから君が起きる前に済ませてしまおうと思っていたのに」

息がかかる程の至近距離で俺を見つめる太宰の顔に、じわりと墨汁を落としたような痣が浮かび上がる。

それは右の頬から始まり、植物の蔦のように目元へ伸びて、目の周囲を覆い尽くすと、額へと広がっていった。

「一応言うけどさ、ごめんとか悪かったとか寒いことを言い出したら、昨日買っておいた古今東西多種多様のオモチャでイカせるからね」

「…言わねえよ。謝ってどうなるもんでもねえんだろ」

触っていいか、と聞いたら、意外にも素直に頬を差し出す。

昨日の夜に浴室で見た傷痕は、ケロイド状であったり、引き皺れて抉れていたたり、どれも赤黒い鏽のような痣であったのに、顔に現れた痣は黒煙のような色をしていた。

俺の傷。これが。

「痛くはねえのか」

「痛いよ。でも傷が痛むというよりは、異能に触れた瞬間が一番痛いかな。注射と同じだよ」

注射なんて、そんな生易しいものではないくせに。

触れていた俺の手を取り、掌にキスをされる。親指と人差し指の間の柔らかいところを唇で挟んで、指の股を舌でねぶられる。首首を齧られたら、小さく声が漏れた。

「亜木冬彦の異能力を無効化したら、足首が枷を掛けられたように重く軋んでね、おかげで君をここまで運んでくるのはかなり骨が折れた」

お返しのように俺の頬を撫でながら、太宰は言った。

「ずっと何かに縛られて生きてきたのだろうね。枷を外してここから逃げたい、そんな『傷』だったよ。傀儡の糸というより、あれは彼にとつてのアリアドネの糸だったのだろう」

「そんなことが、分かるのか」

「安吾みたいに詳しいことまでは分からないけどね」

それならば、俺の傷はどんな中身をしているのかと、深い闇のように黒く染まった太宰の顔を見上げながら尋ねた。

「中也の傷は、……いやだ、やめて、かえりたい、つていつも言ってる。だから、正直興奮するよね」

そんな最低な返しがあるかよと、言いたかった文句はキスで塞がれてしまった。室内の間接照明の光を受けて揺れる優しい左目と、真っ黒な痣に塗りつぶされ、恍惚と光る悪魔のような右目が、ほんの数秒唇が離れる合間に覗いては、俺の意思も理性もためらいも、全て奪い去っていく。

あれほど強く感じていたはずの苛立ちが、どこかへ消え失せていた。大好きで、隠れてコレクションするほどに執着していた顔が自分の業によって傷つけられたというのに、棘のように甘く、背徳的な満足感が心が包まれている。

俺以外の誰かに、本気になるなんて。

俺以外の誰かと、本気で付き合うだなんて。

昼の太宰を、夜の太宰を、その顔を、その声を、俺以外の誰かが見つめられ、俺だけが見られないなんてことは、とても許すことはできない。

まして、俺以外の誰かが、こいつに傷をつけるなどと。

「……成程なァ。こういうことだったのか……」

「ん？ どうしたの中也、どこか痛む？」

手で胸を押さえて溜息を吐いた俺を見て、太宰はキスを止め、ベッドのヘッドボードに寄りかかっていた俺の背をシーツの上に着地させた。髪をさらりと撫でてくれる指の感触に、このまま死んでしまいたいとさえ思う。

「……痛えよ。痛えに決まってるだろ」

付き合いたくないなんて思ったことはなかった。それは本当で、実際に再び顔を合わせて言葉を交わすようになることも、この手に触れられることも、二度とな位と思っていたから偶像を追いかけてはしゃいでいられたのだ。

楽だった。遠巻きに騒いでいるだけの方が。

でも、二人こうも傷だらけでは、どんなに胸が痛くても、触れて、噛んで、繋がらずにはいられない。

「そう。うーん……じゃあ今日は寝る？ 反応が無いのは寂しいけど、そういうプレイだと思って抱くことにするよ。それでいいよね？」

「よかねえよ。本当に中身が残念な奴だな、手前は……ああ、けども面白いわ。抱けよ。昨日の今日で正直痛えけど、手前に触られると俺は気持ち良すぎてトんじまうからな。薬キメてんのと同じだ」

本心を受け入れて急に素直になった俺の態度に太宰は言葉を返せず、訝しむ視線を向けてきた。分かりやすく好きと口にした方がいいのだろうか。いや、そんなこと、わざわざ口で何も隠すつもりがないのだから。

「声、抑えねえから。うるさかったら塞いでくれ」

「……？ ちょっと、どうしたの？ 無理なのだけど……あつ、君たちの言ってる『無理』ってこういう感情？」

「分かってくれたか。手前は俺のファンになるか？」

「冗談やめて」

そんな生易しいものじゃない、と言って、太宰は俺の首筋に舌を這わせながら、下生えを掻き分けて、下肢に手を潜り込ませた。

そこは既に柔らかく解れていて、指で探り当てられると、恥ずかしい音をたてて聞く。俺が気を失っていた間に弄り回されたらしい。これが恋人にすることかよ、と苦笑すると、なに笑ってるのと不機嫌に乳首をかじられた。

「中也が寝ていた間も、私が指を動かすと、小さく声を上げて締め付けてきたよ。相手が私じゃなくてもこんな風になっちゃうのかなって、少し嫉妬した」

「……まじで言ってるなら、怒るぞ」

「本気じゃないなんて言ったことの仕返しだよ」

ヘッドボードの抽斗に隠していたコンドームの袋を取ると、太宰は齒でその封を切り、自分のペニスに宛てがった。褒めてやりたいような少し残念なような複雑な気持ちでそのそり立ったものを眺めていたのを、そんなに欲しそうにしないで、と嬉しそうに揶揄われる。

「ほら……すごいね、中也の方から吸い付いて、飲み込んでく」

亀頭をくっ付けられただけで、身体じゅうがぐずぐずに弛緩していくのが分かった。じゅ、じゅ、と本当に何かを喉で飲み干すような音が聞こえ、圧迫感を必死でやり過ぐす頭とは裏腹に、俺の身体は貪欲に太宰の茎を飲み込んでいく。

「見て、中也。昨日よりも上手にぐっぽり銜えてる」

苦しい？と聞かれれば、苦しいとしか答えられない。それ以上に切ない。これ以上は絶対に入らないと思うのに、太宰

の一部が、まだ俺の中に取り込まれていない部分が見えて、あれも全部欲しい、奥まで入れてほしいと我儘になる。

「いつもこういう景色を、妄想ばかりしていたよ」

不意に太宰がそんなことを呟いた。

「君が部下に医務室へ運ばれた後、いつもそこに忍び込んで、皮膚に焼け付くような君の傷を感じながら、いや、やめてって声を頭の奥で聞きながら、自分の性器を擦ってた」

ずっとこうだったんだ。と最低なことを少女のような顔で言う男に、どうしようもなく胸が焦がされる。

「：いつも、どんな妄想をしてたって？」

俺は足の裏で太宰の腹を押しのけて、両手でとんとその身体を突き飛ばし、その腰の上に跨った。

こうすれば、奥まで食い尽くせる。こいつの余裕ぶった表情も、昔語りも、先っぽからだだらだら涎を垂らしているその雄も。はち切れそうに膨らんだペニスを指で挟んで自分の後ろに導く。みしみしと身体内部が作り変えられていくような不快感と、食欲が満たされることの恍惚。俺の下で、男が唾を飲む音が聞こえた。

「はっ………てめえは、俺のナカをどんなふうにして、どんなふう虐めたいんだよ？ 教えてくれよ……ファンの俺に」

自重で根元まで銜え込んだ後孔から泡立つ音をさせながら、ゆるゆると腰を動かす。内臓のすぐ近くが乱暴に叩かれる。

デカすぎんだよ、とつい弱音を吐いてしまいつつも、口の中が甘い味のするような錯覚に陥り、夢中で敏感な粘膜に擦り付けていた。

「…そうだね。ここまで可愛いとは、さすがの私にも想定外だったのだけれど、あのころの僕が君にしたかったのはこういうことだよ」

一瞬、黒い外套を羽織っていた頃の太宰の幻が見えた。

べちゃべちゃになった性器が抜かれ、シーツに顔を押し付けられた。何だよ、おれがせっかく、と抗議のために開いた口が、後ろからずぶりと貫かれ、掠れた空気だけを吐き出す。

「かつ、は……!」

「ねえ…『やめて』って…言って…?」

「や、やめ…っ」

「ほら、口のなか、可愛がつてあげる。気持ちいいんだよね、中也は舌が敏感だから」

後ろから覆い被さられ、口の中を指で掻き回されながら、ぐりぐりと奥を擦られる。枕の上に唾液が染みを作っていくふやけた指が出ていったら、腰を高く上げさせられて、肌が腫れ上がるほどに激しく突かれた。

「中也…ああ、イキそうだね。すっごい締め付け…私もこのまま出していい…?」

「んっ、あ、あ、んん…! あ、はああっ!」

あられもない声で喘ぐことしかできずに、シーツの上で先に吐精してしまった俺は、射精の余韻に震えながら懸命に頷いた。その瞬間、体内を蹂躪していた太宰のペニスを最奥に強く打ちつけられ、どくどくと熱い精液を注がれる。

「あっ?! いや…って、なんで、やめっ…!」

枕から顔を上げようと視線を変えたとき、床に萎んだコンドームが落ちてるのが見えた。

「てっ…めえ、さっき外し…、ひっ、やだってえ…」

「…なんでそんなに可愛いのか? いっぱい出ちゃう…」

容赦なく奥に注がれている。一度出したのに、足りないと感じ、腰を動かして、硬さを取り戻しては、ばちゅばちゅと突いて、中也…と声ばかり優しくしながら流し込まれた。

「もう…むり、おれ…おさ、む…」

汚濁の後だつてことを忘れてた。疲労と貧血で意識が遠くなっていく。なおも俺の背中を舌で愛撫しながら腰を振る男が、わたし、もしも明日死ぬのなら、それでもいいや、などと言っている。

そんなことを言われたら、何にも言えねえじゃねえか。声を枯らしながら、中指を立てるくらいが精一杯だった。

朝と言うにはまだ早い。窓の外が白と黒の間のような色の光で満たされているのをカーテンの隙間から眺めながら、俺はベッドで寝こけている恋人の顔を見下ろした。

今回の件について、首領^{ボス}への報告は済ませている。早朝なので取り急ぎ簡易的なメールを送信したのだが、すぐに折り返しに着信があった。残党を死亡させてしまったことをまず詫びたのだが、「それは残念。でもまあ、仕方ないね」とあっさりした対応だった。こうなる可能性も十分あるとお考えであつたらしい。

「目下、種田長官を困らせたい案件も無いからね。今回は、中也君の活躍によって守られたものの価値の方が余程上だ。これは最適解であつたと思うよ」

疲れたろう、今日は一日休暇を取りなさい。そう言って、首領^{ボス}からの通話は切れた。実際、戦闘が一割、その他九割で疲れきっていたので、ありがたく休むことにした。

「さて……コイツ、昨日はめちゃくちゃやりやがって……」

ベッドの脇にしゃがんで、寝息を立てている太宰の前髪を指で掬う。もう顔の痣は綺麗に消えていた。俺の傷が、俺の中に戻ったということなのだろう。

それは、俺が生きていればこそのことだ。

寝巻きになっているスウェットのポケットからおもむろに携帯端末を取り出し、カメラアプリを起動させる。太宰の髪を耳に掛けて、一枚撮った。

「……ちよつと、何に使うの、それ」

「狸寝入りかよ」

「目の前に本人がいるって言ったじゃな……あつ！ 今どこかに送信したでしょ！ 消して！ プライバシーの侵害！」

「もう送っちゃったよ。悪いな、愛してんだ」

「そんな言い訳……は？ なに、え？ ちょ、もう一回言つて録音するから！」

「俺みたいなこと言つてんなあ。……あ、つうか今、悪いって謝っちゃったな。うっかりだわ、しくじった」

太宰が被っていた布団をめくり、その隣に潜り込む。

変な顔をしている太宰の心臓に頬を寄せ、携帯端末を取ろうとしていた手を取って、お願いのキスをした。

「それで？ 俺が謝ったら、何をどうしてくれるんだっけ？」

もう、無理。太宰は手で顔を覆って天井を仰ぎ、俺たちが言い慣れた台詞を吐き出した。

感想箱です→

読んだよ～という方、一言いただけると嬉しいです

<https://kansoubako.net/#/EcosanB>



ハートは傷だらけ

2020/03/15 発行

繪子（うしろがみ）

Twitter：@EcosanB

Pixiv ID：2660047

印刷：丸正インキ様

この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。原作者様・出版社様とは一切関係ありません。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）を禁じます。処分する際は同人誌専門の中古書店に売却していただくか、中身が分からない状態にした上で可燃ゴミとして廃棄してください。